

ソ連共産党指導部は
現代最大の
分裂主義者である

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（七）

外文出版社

北京

ソ連共産党指導部は現代最大の
分裂主義者である

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（七）

『人民日報』編集部

『紅旗』誌編集部

（1964年2月4日）

外文出版社

北京

ソ連共産党指導部は

現代最大の分裂主義者である

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（七）

『人民日報』編集部

『紅旗』誌編集部

（一九六四年二月四日）

国際共産主義運動の団結は、現代修正主義思潮のはんらんによつて、こんにちほど重大な脅威にさらされたことはかつてなかった。国際的な範囲でも、いちぶの党の内部でも、マルクス・レーニン主義と修正主義のはげしい闘争がおこなわれている。国際共産主義運動は、かつて見ない重大な分裂の危険に直面している。

社会主義陣営の団結をまもり、国際共産主義運動の団結をまもること、これは全世界の共産主義者、プロレタリアート、革命的人民のまえに提起されたさしせまった任務である。

3 中国共産党は一貫して、マルクス・レーニン主義にもとづき、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明の革命的原則にもとづいて、社会主義陣営の団結と国際共産主義運動の団結をまもり、こ

れをつよめるために、たゆまぬ努力をばらつてきた。過去、現在、将来をとわず、中国共産党の確固不動の立場は、原則を堅持し、団結を堅持し、意見の相違をとりのぞき、共同して敵にあたることである。

ソ連共産党指導部は、修正主義の道へふみだしてிரらい、じぶんたちも国際共産主義運動の団結をまもるために力をつくしているとききりに弁明してきた。さいきん、かれらはとくにやつきになって、「団結」を叫んでいる。これを耳にするにつけ、九十年まえエンゲルスのいつたことばを思いださざるをえない。エンゲルスはつぎのようにのべたのであった。△「団結」の叫びにまだわされてはならぬ。このスローガンをもつともひんばんに口にするものこそ、分裂をおおりにたてている張本人である」。△最大のセクト主義者や論争をこととする者、悪党は、あるときは、だれよりも大きな声で団結をわめきたてるものである」(『マルクス・エンゲルス書簡集』)と。

ソ連共産党指導部は、「団結」の看板をかかげるとともに、中国共産党に「分裂主義」のレッテルをはりつけようとたくらんでいる。ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、「中国の指導者は、社会主義陣営の団結を破壊しているばかりか、世界共産主義運動ぜんたいの団結を破壊し、プロレタリア国際主義の原則をふみにじり、乱暴にも兄弟党の相互関係についての準則にそむ

ている」とのべた。そこで、ソ連の新聞、雑誌は多くの文章をかかげて、中国の共産主義者は「セクト主義者」、「分裂主義者」であると非難しつづけている。

だが、この真相はどうであろうか。いったい、だれが社会主義陣営の団結を破壊し、だれが国際共産主義運動の団結を破壊し、だれがプロレタリア国際主義の原則をふみにじり、だれが乱暴にも兄弟党の相互関係についての準則にそむいているのか。ひと言でいえば、いったいだれがほんとうの、かけ値なしの分裂主義者であるのか。

これらの問題をはつきりさせるのでなければ、社会主義陣営の団結と国際共産主義運動の団結をまもり、強める道を見つけたすことはできないし、分裂の危険をのりこえることはできない。

歴史の回顧

当面の国際共産主義運動における分裂主義の性質をはつきりさせ、分裂主義に反対するたたかいを正しくおしすすめるためには、ここ百余年らしい国際共産主義運動の歴史をふりかえってみるのも有益なことであろう。

共産主義運動の発展の歴史は、マルクス・レーニン主義と日和見主義とのたたかいつらぬが、団結をまもることと分裂をつくりだすこととのたたかいつらぬか

範囲内でもそうであるし、国際的な範囲内でもそうである。長期にわたるたたかひのなかで、マルクス、エンゲルス、レーニンは、理論的にプロレタリアートの団結の真髓を説明するとともに、かれらの実際行動をもって日和見主義、修正主義、分裂主義に反対するかがやかしい手本をしめした。

一八四七年、マルクスとエンゲルスは労働者の最初の国際組織、つまり共産主義者同盟をつつた。マルクスとエンゲルスはこの同盟のために書いた綱領『共産党宣言』のなかで、「万国の労働者、団結せよ！」という戦闘的な呼びかけをうち出し、科学的共産主義の学説にたいして体系立つた、つつこんだ説明をおこない、国際プロレタリアートの団結の思想的基礎をおいた。

マルクスとエンゲルスは、この原則にもとづく国際プロレタリアートの団結のために、生涯を通じてたゆまず努力をつづけた。

一八六四年、マルクスとエンゲルスは各国の労働運動を結束させるために、第一インター、つまり国際労働者協会をつくつた。第一インターの存続した全期間を通じて、マルクスとエンゲルスはバクーニン派、ブルードン派、ブランキー派、ラッサール派その他の分派と原則的なたたかひをおこなつた。なかでも、分裂主義者バクーニン派との闘争はとくにはげしかった。

バクーニン派ははじめからマルクスの学説を攻撃し、マルクスは「インターのなかにじぶんの特殊な綱領とじぶん一個人の学説を確立させ」ようとしていると非難した。その実、じぶんの分派的信条をインターにおしつけ、バクーニンの日和見主義的綱領をインターの綱領におきかえようとくわだてたのは、ほかならぬかれらであつた。かれらは一連の陰謀をたくらんで手段をえらばず、じぶんの「多数」をかきあつめ、セクト的活動と分裂活動をすすめた。

マルクスとエンゲルスは、国際プロレタリアートの真の団結をまもるため、第一インターの分裂をはかつたバクーニン派の公然たる挑戦にたいし、原則のうえできさかも妥協しない態度をとつた。一八七二年、マルクスがみずから出席したインターのハーグ大会で、あくまで分裂主義をとりつづけたバクーニン派は第一インターから除名された。

エンゲルスは、もしもマルクス主義者がハーグでバクーニン派の分裂活動に無原則的な妥協的態度をとつたなら、かならず国際労働運動にゆゆしい結果をもたらしたであろうとのべたことがある。エンゲルスは、「このような状況のもとでは、インターはたしかにほろんだらう、『団結』のためにほろんだらう」(『マルクス・エンゲルス書簡集』)と指摘した。

第一インターはマルクスとエンゲルスの指導のもとで、日和見主義と分裂主義に反対し、国際労働運動におけるマルクス主義の支配的地位のために基礎をおいた。

一八七六年、第一インターが解散を宣言したのち、多くの国に大衆的な社会主義労働者政党が

あいついで生まれた。マルクスとエンゲルスはこれらの政党の結成と発展をじつと見まもり、これらの政党が科学的共産主義の基礎のうえにうちたてられ、発展することをのぞんだ。

マルクスとエンゲルスは、当時ヨーロッパの労働運動で重要な地位をしめていたドイツの労働者政党に、特別の注意と関心をよせた。かれらはいちどならず、ドイツ社会民主党がいわゆる「団結」をもとめて日和見主義と妥協するという腐敗した気風をきびしく批判した。

一八七五年、マルクスとエンゲルスは、ドイツ社会民主党が原則をすててラッサール派と合併したことから生まれた『ゴータ綱領』を批判した。マルクスは、この合併は「あまりにも高い代価を払ってえられたものであり」、「この綱領はまったく好ましからぬものである。それは党を瓦解させるだろう」（『マルクス・エンゲルス二巻選集』第二巻）と指摘した。エンゲルスは、これは「ドイツの社会主義的プロレタリアートぜんたいのラッサール派への降伏である」と指摘し、「このような基礎のうえでの合併はもの一年もたないと確信する」（『マルクス・エンゲルス二巻選集』第二巻）とのべた。

マルクスは『ゴータ綱領』を批判したさい、マルクス主義者は「けつして原則をもって取り引きをするようなことは絶対にしない」（『マルクス・エンゲルス二巻選集』第二巻）という有名な原則を提起した。

そのご、マルクスとエンゲルスはまた、ドイツの党の指導者が日和見主義分子の党内での活動をゆるしたことをきびしく批判した。マルクスは、これらの日和見主義分子は「正義、自由、平等、博愛の女神についての現代神話を唯物論の基礎にとってかわらせようとしている」、これは「党と理論をだいなしにする」ものであるといった。マルクスとエンゲルスはドイツの党の指導者にあてた『通告書』のなかで、こう書いている。「ここ四十年近いあいだ、われわれは階級闘争を歴史の直接の動力とみなして、それをひじょうに重視してきた。とくにブルジョアジーとプロレタリアートのあいだの階級闘争を現代社会変革の大きなテコとみなして、それを重視してきた。したがって、われわれは、運動のなかからこの階級闘争を解消しようとする人たちとともに歩むことはけつしてできない」（『マルクス・エンゲルス書簡集』）

一八八九年、エンゲルスの影響のもとに第二インターが生まれた。第二インターは資本主義の「平和」な発展の時期にあつた。この期間、一方では、マルクス主義がひろく伝播され、『共産党宣言』が世界各国のいく百万の労働者の共同綱領となった。他方では、多くの国の社会主義政党がブルジョアの合法性の利用をそれへの盲目的な崇拜と合法主義にかえ、各国の党内に日和見主義をはらんさせた。

そのため、第二インターの全期間を通じて、国際労働運動は、革命的マルクス主義派とマルク

ス主義を詐称する日和見主義派との二大分派にわかれた。

エンゲルスは日和見主義者と妥協なきたたかきをおこなった。エンゲルスは、資本主義の社会主義への平和的成長というかれらのまちがった理論をとくにきびしく批判した。エンゲルスは、つぎのようにいつた。マルクス主義を詐称する日和見主義者にたいして、「マルクスはたぶんハインゲルスの模倣者にいつたことばをこれらの先生がたに贈ることであろう——『わたくしがまいたのは竜のたねであるが、とれたのはノミであつた』と。」（『日和見主義に反対したマルクスとエンゲルス』、中国人民出版社一九五八年版）

一八九五年にエンゲルスが世を去ると、これらの「ノミ」は登場して、公然と系統的にマルクス主義を修正し、しだいに第二インターの指導的地位をのつとるようになった。

偉大なレーニン¹はエンゲルスの亡きあと、国際労働運動のもつともすぐれた革命家として、マルクス主義をまもり、第二インターの修正主義に反対するという重大な任務をになつた。

第二インターの修正主義者たちがマルクス主義はすでに「不完全な」、²「時代おくれのもの」になつたとわめきたてたとき、レーニンは、「われわれは完全にマルクス理論の基礎のうえに立っている」、「なぜなら、このような理論だけがすべての社会主義者を結集できるからだ」（レーニン『われわれの綱領』、『レーニン全集』第四巻）とおごそかに宣言した。

レーニンはまずロシアにマルクス主義的政党をつくるため奮闘した。第二インターの日和見主義的政党と根本的に異なる新しい型の政党をつくるため、レーニンはロシア社会民主労働党内部のいろいろな反マルクス主義的分派と妥協なきたたかきをすすめた。

当時のロシア社会民主労働党内部には、第二インターの他の党とおなじく、革命派と日和見主義派が存在していた。革命派とはレーニンの指導するボルシェビキのことであり、日和見主義派とはメンシェビキのことである。

レーニンの指導するボルシェビキは、プロレタリア政党の純潔と統一をまもるため、理論面と政治面でメンシェビキと長期にわたるたたかいをすすめ、一九一二年ついに、日和見主義と分裂主義を固執するメンシェビキを党から一掃した。

レーニンに反対するすべての日和見主義的分派はもつとも悪どいことばをつかつて、レーニンをののしつた。かれらはあらゆる手をつくして、レーニンに分裂主義の罪名をかぶせようとした。当時、トロツキーはレーニンに反対するあらゆる分派をかきあつめ、「非分派性」の旗をかかげて、レーニンとボルシェビキ党をさかんに攻撃し、レーニンは「篡奪者」であり、「分裂屋」であるとののしつた。レーニンはこれにこたえて、「非分派性」の看板をかかげるトロツキーこそ、「もつとも悪質な分派活動の残余のもつとも悪質な代表者」であり、「もつとも悪どい

分裂派の最たるもの」(レーニン『統一の叫びにかくれた統一の破壊について』、『「八月」ブロックの分解について』、『レーニン全集』第二〇巻)であるといった。

レーニンはつぎのようにはっきりと表明した。「統一、これは偉大な事業であり、偉大なスローガンである！ だが、労働者の事業が必要としているのはマルクス主義者の統一であつて、マルクス主義者と、マルクス主義に反対し、これを歪曲するものとの統一ではない」(レーニン『統一について』、『レーニン全集』第二〇巻)

レーニンのメンシェビキにたいするたたかいは、大きな国際的意義をもっていた。なぜなら、メンシェビキは第二インターの修正主義のロシア的形態または変種であつて、第二インターの修正主義的指導者たちの支持をうけていたからである。

レーニンはメンシェビキに反対するとともに、第二インターの修正主義にたいしても一連のたたかいをすすめた。

第一次世界大戦のまえ、レーニンは理論面と政治面で第二インターの修正主義者を批判したほか、第二インターのシュトゥットガルト会議とコペンハーゲン会議に出席して、かれらとたたかつた。

第一次世界大戦の勃発で、第二インターの指導者たちは、プロレタリアートを公然と裏切つ

た。かれらは帝国主義の利益のために各国のプロレタリアートを互いに同士討ちさせ、国際プロレタリアートのもつともゆゆしい分裂をつくりだした。ルクセンブルグもいったように、修正主義者は「いぜんの誇らかなスローガン『万国の労働者、団結せよ！』を、いまは戦場で『万国の労働者、殺しあえ！』に変えてしまった」(ローザ・ルクセンブルグ『講演・論文集』第二巻、一九一一年ベルリン版)のである。

当時、第二インターのなかでもつとも勢力があり、もつとも影響力があつた党は、マルクスの故国ドイツの社会民主党であつた。ところが、はかならぬこの党がまさきにドイツ帝国主義の側に立ち、国際労働運動分裂の張本人となつたのである。

この緊急のさい、レーニンは身を挺して、国際プロレタリアートの団結をまもるためにだんごとしてたたかつた。

レーニンは一九一四年八月に発表した『革命的社会民主党のヨーロッパ大戦における任務』という論文のなかで、第二インターの破産を宣言するとともに、第二インターの大多数の指導者、とくにドイツ社会民主党の指導者たちが社会主義を直接に裏切つた行為をはげしく非難した。

第二インターの修正主義者がブルジョアジーとのひそかな同盟から公然たる同盟に転じたこと、かれらが国際労働運動のなかでもはや挽回しようのない分裂の情勢をつくりだしたことに、こ

うしたことにたいし、レーニンはずいぶん指摘した。「いまや、日和見主義とだんこ決裂せず、日和見主義のかならず失敗する必然性を大衆に説明しないなら、社会主義の任務をなしとげることができないし、労働者の真の国際主義的団結を実現することはできない」（レーニン『戦争とロシア社会民主主義』、『レーニン全集』第二巻）と。

だからこそ、レーニンは、ヨーロッパの多くの国々にマルクス主義者が日和見主義者と決裂することをだんこ支持したし、第三インターをつくって、すでに破産した第二インターにとつてかわらせ、国際プロレタリアートの革命的団結を再建するよう、勇敢に呼びかけたのであった。

一九一九年三月、第三インターが生まれた。第三インターは第二インターの活動の成果をうけつぎ、その日和見主義的、社会排外主義的、ブルジョア的、小ブルジョア的ながらわしいものを一掃し、国際プロレタリア革命の事業をひろく深く発展させた。

レーニンの理論と実践は、マルクス主義を新たな発展段階、つまりレーニン主義の段階におしすすめた。マルクス・レーニン主義を基礎として、国際プロレタリアートの団結、国際共産主義運動の団結は、いつそう強化され拡大された。

経験と教訓

国際共産主義運動の発展の歴史はなにを物語っているか。

第一に、国際共産主義運動の歴史は世界のあらゆる事物と同じように、国際労働運動も総じて、一つから二つに分かれるということを示している。プロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争は、不可避免的に共産主義の隊列のなかに反映してくるものである。共産主義運動の発展過程で、不可避免的にこれの日和見主義が生まれ、不可避免的にマルクス・レーニン主義に反対する日和見主義の分裂活動が生じ、また不可避免的に日和見主義と分裂主義に反対するマルクス・レーニン主義の闘争が引き起こされるのである。マルクス・レーニン主義と国際労働運動は、まさにこのような対立面のたたかいのなかで発展してきたのである。マルクス・レーニン主義を基礎とする国際労働運動の団結も、まさにこのような対立面のたたかいのなかで強固になり、強化されてきたのである。

エンゲルスはかつて、△プロレタリアートの運動は必然的にいろいろな発展段階を経るものである。そしてどの段階でも、いちぶの人がたちどまって、それ以上前進しないのである。この点だけでも、なぜ『プロレタリアートの一致団結』は實際上、どこでも互いに生きるか死ぬかの闘争をおこなっているいろいろな党派の形で実現されるか、ということを示している」（『マルクス・エンゲルス書簡集』）とのべたことがある。

事實はまさにこの通りであった。共産主義者同盟、第一インター、第二インター、もともと統一の目的であったこれらのものが、いずれもその発展過程で、一つから二つにわかれ、互いにたまたま二つの部分になったのである。国際的な規模でおこなわれた日和見主義と分裂主義に反対する闘争は、そのたびごとに、国際労働運動を新たな段階におしすすめ、それを新たな基礎のうえで、いつそう強固に、いつそうひろく団結させた。十月革命の勝利と第三インターの結成は、つまり、第二インターの修正主義と分裂主義に反対する闘争がもたらしたもつとも偉大な成果であった。

団結は、闘争ひいては分裂をへて、新たな基礎のうえで新たな団結に達する。これがつまり国際労働運動の発展の弁証法である。

第二に、国際共産主義運動の歴史がまた明らかにしているように、共産主義運動の発展のそのその歴史の時期に、団結をまもることと分裂をつくりだすこととのたたかいは、本質的には、マルクス・レーニン主義と日和見主義、修正主義とのたたかいであり、マルクス主義を堅持することとマルクス主義を裏切ることとのたたかいである。

国際的な範囲内でも、一国のなかでも、ただマルクス・レーニン主義を基礎とすることによつてのみ、プロレタリアートの真の団結がありうるのである。

国際的な範囲内でも、一国のなかでも、日和見主義と修正主義が大いにはびこっているところではどこでも、プロレタリアートの隊列にかならず分裂がおこる。共産主義運動におけるどの分裂も、つねに日和見主義者と修正主義者がマルクス・レーニン主義に反対し、裏切ることによつてひきおこされたものである。

分裂主義とはなにか。

分裂主義とは、つまり、マルクス・レーニン主義にたいして、分裂活動をおこなうことである。だれにせよ、もしマルクス・レーニン主義に反対し、これを裏切り、プロレタリアートの団結の基礎を破壊しようとするなら、その人は分裂主義者なのである。

分裂主義とは、つまり、プロレタリアートの革命政党にたいして、分裂活動をおこなうことである。だれにせよ、もし修正主義の路線を固執し、プロレタリアートの革命党をブルジョア的の改良党に変えようとするなら、その人は分裂主義者なのである。

分裂主義とは、つまり、革命的プロレタリアートと広はんな勤労人民にたいして、分裂活動をおこなうことである。だれにせよ、もしプロレタリアートと勤労人民の革命的意志、根本的利益にそむく綱領と路線を実行しようとするなら、その人は分裂主義者なのである。

レーニンは、「大多数の目ざめた労働者が明確な決議の指導のもとで団結したところではどこ

でも、統一された意見と行動とがみられる」のにたいし、日和見主義者は「かれらがもつとも恥知らずに大多数の労働者の意志にそむくという点からいえば、まぎれもなく分裂主義である」(レーニン『統一のさげびにかかれた統一の破壊について』、『レーニン全集』第二〇巻)とのべたことがある。

分裂主義はブルジョアジーの要求にこたえて、プロレタリアートの団結を分裂させ、ブルジョアジーに奉仕している。ブルジョアジーの一貫した政策は、つまりプロレタリアートを分裂させることである。かれらがプロレタリアートを分裂させるもつとも悪らつな手口は、プロレタリアートの隊列の内部で自分の代理人を買収し、育てあげることである。そして、日和見主義者と修正主義者はブルジョアジーの代理人にはかならないのである。かれらが追求しているのは、プロレタリアートを団結させてブルジョアジーとたたかわせることではなく、逆にプロレタリアートをブルジョアジーと協調させようとすることである。第二インター時期のベルンシュタイン、カウツキーなどの修正主義者が、つまり、こうであった。各国のプロレタリアートが団結して帝国主義戦争を国内戦争にかえるのを帝国主義がもつとも恐れていたころ、かれらはすすみでて国際労働運動を分裂させ、プロレタリアートとブルジョアジーとの協調を宣伝した。

共産主義の隊列のなかで、だれにせよ、もしブルジョアジーの要求にこたえて、マルクス・レーニン主義にたいし分裂活動をおこなない、プロレタリアートの革命政党にたいし分裂活動をおこなない、革命的プロレタリアートと広はんな勤労人民にたいし分裂活動をおこなおうとするならば、たとえ一時的に多数派の地位をしめ、ひいては指導的地位をのつとろうとも、その人たちはやはり分裂主義者なのである。

第二インターの時期に、ベルンシュタイン、カウツキーのようなやからを代表者とする修正主義者が多数派の地位にあつたのにたいし、レーニンを代表者とするマルクス主義者は少数派の地位にあつた。だが、分裂主義者はレーニンの革命派ではなくて、明らかにベルンシュタイン、カウツキーなどの日和見主義派であつた。

一九〇四年に、ロシア社会民主労働党内のメンシェビキは党中央の指導的地位をのつとつたが、かれらはやはり分裂主義者であつた。当時、レーニンは、「中央諸機関(中央機関紙、中央委員会および評議会)は党と関係を絶ち」、「中央諸機関はみずから党の外においた。中央諸機関を支持するのはだれか、党を支持するのはだれか。中間の立場はないのである」(レーニン『ボリシェビキのチューリヒ・グループへの手紙』、『レーニン全集』第八巻)と指摘した。

要するに、日和見主義と修正主義は、分裂主義の政治的、思想的根源である。分裂主義は、日和見主義と修正主義の組織上のあらわれである。日和見主義と修正主義は、つまり分裂主義であ

り、またセクト主義でもある、ということが出来る。修正主義者は、共産主義運動におけるもっとも大きな、もつともにくむべき分裂主義者とセクト主義者である。

第三に、国際共産主義運動の歴史がさらに明らかにしているように、プロレタリアートの団結は、日和見主義や修正主義、分裂主義とのたたかひのなかで強固にされ、発展してきたのである。団結を堅持するためのたたかひは、原則を堅持するためのたたかひと切りはなせないのである。

プロレタリアートの必要としている団結は、階級的団結、革命的団結、共同の敵に反対するための団結、共産主義という偉大な目標をめざしてたたかうための団結である。マルクス・レーニン主義は、国際プロレタリアートの団結の理論的、政治的基礎である。国際プロレタリアートには、理論上、政治上の一致があつてこそ、はじめて組織上、行動上の一致がありうるのである。

ただ、原則を堅持し、マルクス・レーニン主義を堅持してこそ、はじめてプロレタリアートの真の革命的団結を実現することができる。原則を放棄し、日和見主義者と野合すること——これはプロレタリアートの団結などというものではなくて、レーニンものべたように、「プロレタリアートと自国のブルジョアジーとの統一を意味し、国際プロレタリアートの分裂を意味し、手先どもの統一と革命家の分裂とを意味している」(レーニン『フランスの「社会主義者の正直な声」、

『レーニン全集』第二巻)

レーニンはまたつぎのように指摘した。ブルジョアジーに買収され、育成された日和見主義的分派は、「『消滅』される、つまり、くつがえされるまでは、また社会主義的なプロレタリアートにたいするそのあらゆる影響がとりのぞかれるまでは、亡ぶことがないのである」、「ブルジョアジーがくつがえされるまでは亡ぶことがないのと同じように」。それだから、「日和見主義的分派となさけ容赦なくたたかわなければならない」(同上)

日和見主義者、修正主義者が国際共産主義運動を公然と分裂させようとする挑戦にたいし、マルクス・レーニン主義者は、絶対に原則の上で譲歩をすることができず、ただ、かれらの分裂主義とだんことしてたたかうだけである。これは、マルクス、エンゲルス、レーニンのきわめて尊い遺訓であり、また国際共産主義運動の団結をまもるための唯一の正しい道でもある。

現代最大の分裂主義者

ここ数年らしいの事実が物語るように、フルシチョフをかしらとするソ連共産党指導部はすでに現代修正主義のおもな代表者となっており、国際共産主義運動の最大の分裂主義者でもある。

ソ連共産党第二十回大会からソ連共産党第二十二回大会までに、ソ連共産党指導部の修正主義

は完べきな体系をなすにいたった。かれらはプロレタリア革命とプロレタリアート独裁に反対する修正主義の路線、つまり、「平和共存」「平和競争」「平和移行」「全人民の国家」「全人民の党」という修正主義の路線をうちだした。かれらはこのような修正主義の路線をむりやりに各国の兄弟党におしつけ、これを一九五七年と一九六〇年の二回にわたる兄弟党の会議できまった国際共産主義運動の共同の路線にとつてかわらせようとしている。マルクス・レーニン主義の路線を堅持して、ソ連共産党指導部の修正主義の路線に抵抗するものは、だれでもソ連共産党指導部から打撃をうけるのである。

マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を裏切り、修正主義と分裂主義の路線をおしすすめ、国際共産主義運動の団結の基礎を破壊し、当面のゆゆしい分裂の危険を一手につくりだしたのは、ほかならぬソ連共産党指導部である。

ソ連共産党指導部は社会主義陣営の強化と増強に力をつくすどころか、社会主義陣営を分裂、瓦解させ、もともと結構至極な社会主義陣営をメチャクチャにしてしまった。

かれらは宣言と声明の規定している兄弟国の相互関係についての準則にそむいて、社会主義の兄弟国にたいし大国排外主義と民族的利己主義の政策をおしすすめ、社会主義陣営の団結を破壊した。

かれらはほしいままに兄弟国の主権をそこない、兄弟国の内政に干渉し、転覆活動をすすめて、各方面から兄弟国を支配しようとしてくわだてている。

かれらはいわゆる「国際的分業」に名をかりて、兄弟国が自力更生で社会主義を建設する方針に反対し、兄弟国が独立自主の基礎のうえに経済を発展させることに反対し、兄弟国をかれらの経済的従属物にかえようとしている。かれらは経済の比較的おくれた兄弟国にむりやり工業化を放棄させ、これらの国をかれらの原料補給地、余剰物資販売市場にかえようとしてくわだてている。

ソ連共産党指導部はかれらの大国排外主義の政策をおしすすめるにあたって、手段をえらばず、ともすれば兄弟国に政治的、経済的圧力、ひいては軍事的圧力をくわえている。

ソ連共産党指導部は、アルバニアの党と国家の指導部をくつがえすよう公然と呼びかけ、凶暴にもアルバニアとのすべての経済関係と外交関係を断絶し、横暴にもワルシャワ条約機構と経済相互援助会議におけるアルバニアの加盟国としての正当な権利を奪った。

ソ連共産党指導部は中ソ友好同盟相互援助条約にそむいて、中国で仕事を手伝っている一三九〇名のソ連専門家の引き揚げを一方的に決定し、三四三にのぼる専門家派遣の契約と契約補充書を破棄し、二五七にのぼる科学技術協力の項目を廃止し、貿易面でも、中国にたいし制限と差別

の政策をとった。かれらは中ソ辺境事件を挑発し、中国の新疆地区にたいして、大がかりな転覆活動をすすめた。フルシチョフはさらに、中国共産党中央委員会の指導的同志にたいし、中国共産党内部の反党分子は、かれの「良き友」だとさえ一度ならずいった。かれは、中国の反党分子が党の社会主義建設の総路線、大躍進、人民公社を攻撃したことをほめたたえ、それは「ひじょうに勇氣のある」行為であるなどといった。

国家関係を悪化させるこうしたすべてのゆゆしい措置は、資本主義国のあいだでさえ、ごくまれにしか見られないものである。ところが、ソ連共産党指導部は社会主義の兄弟国にたいし再三再四このようなおどろくべき極端な手を打ったのである。それでいながら、ソ連共産党指導部はあつかましくも口ぐせのように、じぶんこそ「プロレタリア国際主義に忠実である」と言いふらしている。われわれはたずねたい。きみたちのこうした行為は、ほんのわずかでも国際主義のにおいがするであろうか、と。

ソ連共産党指導部の大國排外主義と分裂主義は、兄弟党にたいする関係の面でも同様にきわまってあらわれている。

ソ連共産党指導部はソ連共産党第二十回大会いらい、いわゆる「個人迷信反対」に名をかりて、極力じぶんの思いどおりに他の兄弟党の指導部を更迭しようとしてくわだてている。ごく最近に

なつても、かれらはいいかかわらず、いわゆる「個人迷信反対」をあくまで団結回復の条件とし、これを「すべての共産党がかならずまもらねばならない」「原則」①とするよう主張しつづけている。

ソ連共産党指導部は、宣言と声明が規定している兄弟党間関係についての準則にそむいて、兄弟党の独立と平等の地位を無視し、あくまで国際共産主義運動のなかに封建的な家父長的支配を確立して、兄弟党間の関係を「親子の党」の関係に変えようとしている。フルシチョフは再三再四、兄弟党を「分別のない子供」にたとえ、じぶんは「母親」②気どりである。かれはこうした封建的なうねばれにひたつて、世の中には恥というものがあることをまったく知らないのである。

ソ連共産党指導部は、兄弟党が話し合いで見解を統一するという原則をまったく眼中におかず、まえまえから独断的にことをはこび、さかんに采配をふりまわすくせがある。かれらは兄弟党の共同の取り決めにほしのままに破棄し、兄弟党に關係ある共通の重大問題についてかかってきままに決定をおこない、その既成事実をむりやりに兄弟党にうけいれさせている。

ソ連共産党指導部は、兄弟党が内部の話し合いを通じて意見の相違を解決するという原則をふみにじり、まず自己の党大会を利用して、マルクス・レーニン主

義を堅持する兄弟党に大がかりな公然たる攻撃をくわえた。

ソ連共産党指導部は兄弟党をその外交将棋の歩とみなしている。フルシチョフの言うことは猫の目のようにかわり、きようはこういつたかと思えば、あすはまたああいう。そして、兄弟党がどこからどこへ行くのも知らないままに自分の笛につれて踊るよう強要している。

ソ連共産党指導部は多くの共産党の内部に火をつけ、あおりたて、かれらの修正主義的路線の追随者を支持して、党の指導部を攻撃させたり、指導的地位をのりとりさせたり、党内のマルクス・レーニン主義者に打撃をくわえさせたり、さらには不法にもこれを除名させたりして、これらの兄弟党の内部に分裂をつくりだしている。多くの資本主義国の兄弟党に組織上の分裂があらわれたのは、ソ連共産党指導部のこうした分裂主義的政策のせいにはかならない。

ソ連共産党指導部はまた、兄弟党が共同で出版している雑誌「平和と社会主義の諸問題」を修正主義、セクト主義、分裂主義をおしすすめるための道具に変え、雑誌創刊当時の会議の取り決めにそむいて、マルクス・レーニン主義的兄弟党をほしいままに攻撃している。

ソ連共産党指導部はさらに、修正主義の路線を国際民主組織におしつけて、国際民主組織の正しい路線を変え、これらの組織のなかに分裂をつくりだそうとつとめている。

ソ連共産党指導部は敵味方の関係をまったく転倒させている。かれらはもともとアメリカ帝国

主義とその手先にむけるべき闘争のほこ先を、マルクス・レーニン主義的兄弟党と兄弟国にむけている。

ソ連共産党指導部はひたすら「ソ米の協力で世界を牛耳ろう」として、全世界人民のもつとも凶悪な敵アメリカ帝国主義をもつともたよりになる友人とみなし、逆にマルクス・レーニン主義を堅持する兄弟党と兄弟国を敵とみなしている。かれらはアメリカ帝国主義、各国の反動派、裏切り者チトー一味、さらには右翼社会民主主義者とグルになって、社会主義の兄弟国、兄弟党、各国のマルクス・レーニン主義者と革命的人民に反対している。

ソ連共産党指導部は、アイゼンハワーやケネディ、あるいはその他の何処かから救いのワラでもつかんだと思いきや、また、自己の立場が有利だと思いきや、すっかり得意になって、マルクス・レーニン主義を堅持する兄弟党と兄弟国をかれらがアメリカ帝国主義と政治的取り引きをするためのいけにえにしようとする。

ソ連共産党指導部は、自己のあやまった政策が壁につきあたったとき、また、自己の立場が困難におちいつたときには、こんどは面目がつぶれてカッとなり、マルクス・レーニン主義を堅持する兄弟党と兄弟国に大いに反対し、他人を自己の贖罪のヤギにする。

以上の一連の事実をみてわかるように、ソ連共産党指導部はソ連人民の利益にそむき、社会

主義陣営と国際共産主義運動の利益にそむき、全世界の革命的人民の利益にそむいて、プロレタリア国際主義を徹頭徹尾裏切る道へとふみだしたのである。

これらの事実がはっきりと物語っているように、ソ連共産党指導部は自己の修正主義をマルクス・レーニン主義に対抗させ、自己の大国排外主義と民族的利己主義をプロレタリア国際主義に対抗させ、自己のセクト主義と分裂主義をプロレタリアートの国際的団結に対抗させている。こうして、ソ連共産党指導部は、歴史上のすべての日和見主義者、修正主義者とおなじように、自分じしんを国際共産主義運動せんたいの分裂をつくりだす者、社会主義陣営の分裂をつくりだす者、さらにまた、多くの兄弟党内部の分裂をつくりだす者にしてあげているのである。

ソ連共産党指導部の修正主義と分裂主義は、歴史上と現代のあらゆる日和見主義者と分裂主義者にくらべていっそう大きな危害性をもっている。周知のように、ソ連共産党指導部の修正主義は、レーニンがきずきあげた、世界でもっとも権威のあるソ連共産党にあらわれ、世界最初の社会主義国である偉大なソ連にあらわれたのである。長年のあいだ、全世界のマルクス・レーニン主義者と革命的人民はみな尊敬の念をいだいてソ連共産党を見まもり、ソ連は世界革命の基地であり、闘争の手段であるとみなしてきた。ソ連共産党指導部はほかでもなくこうした状況を利用

し、レーニンの党の権威を利用して、最初の社会主義国の権威を利用して、かれらの修正主義と分裂主義の本質をおおいかくし、真相を知らない人びとをあざむいているのである。同時に、かれらはまたふたつの手口を使いなれており、実際には分裂に分裂をやつておりながら、口ききでは「団結」、「団結」とわめきたてている。このような手口も、ある時期にはあるていど人びとをまだわず役割をはたしている。少なからぬ人がソ連共産党指導部の修正主義と分裂主義をいちばやく見やぶれないでいるのも、ソ連共産党指導部にたいする伝統的な信頼や事実の真相を知らな

いためにほかならない。ソ連共産党指導部は社会主義の大国の権力をにぎり、広はんな国際的影響力をもっているからこそ、かれらの修正主義と分裂主義の路線が国際共産主義運動とプロレタリア世界革命の事業にもたらした損害は、歴史上のいかなる日和見主義者と分裂主義者もそれにくらべようのないほど大きいものである。

ソ連共産党指導部は史上最大の修正主義者であり、史上最大のセクト主義者、分裂主義者でもあるといつてよい。

だれも見えてとつていっているように、ソ連共産党指導部の修正主義と分裂主義は、全世界にわたる修正主義のいっそうのはんらんを大いに助長し、帝国主義と各国の反動派に大いに手をかしてや

つている。

ソ連共産党指導部の修正主義と分裂主義は、国内のブルジョアの要因のはらんと増大の産物であるとともに、帝国主義の政策の産物、とくにアメリカ帝国主義の核恐喝政策と「平和的進化」政策の産物でもある。ひるがえって、かれらの修正主義と分裂主義の理論と政策はまた、国内にはならんするブルジョア勢力に奉仕するとともに、帝国主義にも奉仕し、世界人民の革命的意志をマヒさせ、世界人民の革命闘争をはばむ役割をはたしている。

事実、ソ連共産党指導部は帝国主義とその手先から熱烈な称賛と喝采をばくしている。

アメリカ帝国主義は、フルシチョフが国際共産主義運動のなかに分裂をつくりだしたことをとくにほめそやしている。かれらは、「見うけるところ、西側との緩和をもとめたいというフルシチョフのねがいはあきらかに誠意のこもったものであり、だから、かれは共産主義運動の分裂の危険をおかしてもこれを実現しようとのぞんでいるのである」⑧といっている。かれらはまた、「フルシチョフはスターリン時代の統一した集団を、もはや挽回しようもないほどうちこわしてしまった。これはフルシチョフの最大の貢献——共産主義にたいする最大の貢献ではなく、西側の世界にたいする最大の貢献——であるかもしれない」④とか、「われわれは、かれが中国人との関係の処理をあやまつたことに感謝しなければならない。……われわれはまた、かれがとつぜ

んひじょうに唐突な多くの提案を出して、国際共産主義運動を混乱させたことに感謝しなければならぬ」⑤といっている。

かれらは、フルシチョフは「西側が期待をもつてつきあつてゆける最良のソ連首相である。いま、西側はかならず、かれの地位をいつそう弱めるようないかなる行動もとらないようにしなければならぬ」⑥とか、「いま、アメリカ政府はフルシチョフと赤い中国との紛争にたいして、アメリカがフルシチョフに最大限の支持をあたえるべきであると信じている」⑦ともいっている。

ソ連共産党指導部をおだてあげる応援団のなかには、政治上ずつとまゑに破産したトロツキストもふくまれている。スターリンにたいして、アメリカ帝国主義にたいして、ユーゴスラビアの修正主義にたいしてどういう態度をとるべきかというこうした基本的諸問題のうえで、トロツキストはさかんにソ連共産党指導部を支持している。かれらは、「ソ連共産党第二十回大会、とりわけソ連共産党第二十二回大会によつてもたらされた情勢は、それぞれの労働者国家の内部にわれわれの運動を復活させるのにきわめて有利である」⑧とか、「われわれはすでに二十五年以上もその準備をすすめてきたが、いまやわれわれはそれに参加して、強力に行動しなければならぬ」⑨といっている。かれらは、「フルシチョフが非スターリン化を實行してより保守的な一派

に反対しているたたかいに、われわれは批判的な支持をあたえねばならない」^⑩と宣言している。

みていただきたい。革命のあらゆる敵はみな熱心にソ連共産党指導部のテコいれをしている。これはマルクス・レーニン主義にたいする態度の問題、世界革命にたいする態度の問題で、かれらとソ連共産党の指導者とが共通のことばを見いだしているからにはかならない。これは、ソ連共産党指導部の修正主義と分裂主義の路線がアメリカ帝国主義の反革命の要求にこたえているからにはかならない。

レーニンものべているように、ブルジョアジーは「労働運動内部の日和見主義的な分派活動家によってブルジョアジーをまもる方が資本家みずから出馬するよりもずっとましだ」（レーニン『共産主義インターナショナル第二回大会』『レーニン全集』第三一巻）ということをよく知っている。いま、帝国主義の旦那方は上きげんで、ソ連共産党指導部にプロレタリア世界革命の事業を破壊する道を鳴りもの入りできりひらかせている。

ソ連共産党指導部は国際共産主義運動に分裂のゆゆしい危険をつくりだしているのに、その罪を他人になすりつけようとして、中国共産党その他のマルクス・レーニン主義的政党を「分裂主義」だとか、「セクト主義」だとかと誹謗し、根も葉もないかすかすの罪名をデッチあげている。ソ連共産党指導部がわれわれにたいしておこなった幾つかのおもな誹謗に、われわれはここでひとつづつ反ばくをくわえる必要があると考える。

いわゆる「反ソ」を反ばくする

ソ連共産党指導部は、かれらの修正主義と分裂主義に抵抗し批判するものをみな「反ソ」呼ばわりしている。これはまことに人をおどかさす罪名である。世界最初の社会主義国に反対し、偉大なレーニンのまぎあげた党に反対する。これは無法もはなはだしいことではないか！

だが、われわれはソ連共産党指導部に、虚勢をはらないようにおすすめる。「反ソ」の罪名はどうしてもわれわれにかぶせることができない。

われわれはまた、ソ連共産党指導部にうぬげれないようにおすすめる。「反ソ」の罪名はどうしてもマルクス・レーニン主義者の口をふさぐことができない。

われわれ中国の共産主義者は、全世界のすべての共産主義者、革命的人民とともに、偉大なソ連人民、ソビエト国家、ソ連共産党を一貫して心から尊敬し、まごころこめて愛している。それは、ソ連人民がレーニンの党の指導のもとに十月革命の勝利の炬火を点じ、国際プロレタリア革

命の新紀元をひらき、さらに、そのこの年月に共産主義への道の最前列を歩んできたからである。それは、ソ連共産党とソビエト国家がレーニンとスターリンの指導のもとにマルクス・レーニン主義の対内対外政策をおしすすめ、社会主義建設のなかで史上に例をみない成果をあげ、反ファシズム戦争のなかでもっとも偉大な貢献をし、各国のプロレタリアートと勤労人民の革命闘争に国際主義的な支援をあたえてきたからである。

スターリンは世を去るしばらくまえに、つぎのようにのべたことがある。△「兄弟党の代表はわが党の勇敢さと成果に敬意を払い、わが党に世界革命運動と労働運動の『突撃隊』という称号をあたえてくれた。かれらはそうすることによって、この『突撃隊』の成果がいまなお資本主義の抑圧のもとでしいたげられている各国人民の状態を改善しうるよう期待していることを表明したのだ。わが党はこのような期待にそむかなかったと思う」(ソ連共産党第十九回大会におけるスターリンの演説)

スターリンは、レーニンのきずきあげたソ連共産党が全世界の共産主義者の期待にそむかなかったといった。これはまったく正しい。この党が中国共産党をふくむ全世界の兄弟党の尊敬と支持をかちとつたのは、まったくその名に恥じないことであつた。

だが、フルシチョフをかしらとするソ連共産党指導部は、ソ連共産党第二十回大会いらい、スターリンに大いに反対し、修正主義の道へふみこんだ。かれらは全世界の共産主義者の期待にそむかなかつたといえるだろうか。そうはいえない。

中国共産党中央委員会は、国際共産主義運動の総路線についての提案のなかで、社会主義諸国の人民、国際プロレタリアートと勤労人民は、社会主義国の共産党にたいして共通の要求をもっている、と指摘した。この共通の要求とはつぎのようなものである。

第一に、「マルクス・レーニン主義の路線を堅持して、マルクス・レーニン主義の正しい対内対外政策を実行すること」

第二に、「プロレタリアート独裁をうちかため、プロレタリアート指導下の労働同盟をうちかためて、経済戦線、政治戦線、思想戦線で社会主義革命を最後までやりぬくこと」

第三に、「広はんな人民大衆の積極性と創造性を發揮して、計画的に社会主義建設をすすめ、生産を發展させ、人民の生活を改善し、国防を強化すること」

第四に、「マルクス・レーニン主義を基礎とする社会主義陣営の団結をかため、プロレタリア国際主義を基礎とする社会主義諸国の相互の支持を実行すること」

第五に、「帝国主義の侵略政策と戦争政策に反対し、世界平和をまもること」

第六に、「各国反動派の反共、反人民、反革命の政策に反対すること」

第七に、「全世界の被抑圧階級と被抑圧民族の革命闘争を援助すること」

中国共産党中央委員会はまた、社会主義國の共産党がこれらの要求を実現することは、「自國の人民にたいしてはたすべき当然の義務であり、また国際プロレタリアートと勤労人民にたいしてはたすべき当然の義務である」と指摘した。

だが、ソ連共産党指導部は、ほかでもなくこれらの要求を裏切り、兄弟党の期待にそむいて、修正主義と分裂主義の路線を實行している。これは国際プロレタリアートと勤労人民の利益にそむくばかりでなく、ソ連共産党、ソビエト國家、ソ連人民の利益にもそむくものである。

眞にソ連に反対しているのは、ほかでもなくフルシチョフをかしらとするソ連共産党指導部なのである。

ソ連共産党指導部は、スターリンを全面的に否定し、最初のプロレタリアート独裁と社会主義制度をあれほど暗黒な、あれほど恐ろしいものに描きあげている。これが反ソでなくてなんだろうか。

ソ連共産党指導部は、プロレタリアート独裁を解消し、ソ連共産党のプロレタリア政党としての性格を変えると宣言し、ブルジョア勢力がソ連ではらんするため大きく門をひらいている。これが反ソでなくてなんだろうか。

ソ連共産党指導部は米ソの協力をもとめて、ひたすらアメリカ帝國主義にこびへつらい、ひざまずいて、偉大なソ連の面目をまるつぶしにしている。これが反ソでなくてなんだろうか。

ソ連共産党指導部は大国排外主義の政策をおしすすめ、従屬國にたいするのと同一の態度で社会主義の兄弟國をあつかい、ソビエト國家の名誉をさげすつけている。これが反ソでなくてなんだろうか。

ソ連共産党指導部は各國人民の革命闘争に反対し、それを阻止し、帝國主義と新植民地主義の弁護人となつて、レーニンの党の光榮ある國際主義的伝統をけがしている。これが反ソでなくてなんだろうか。

要するに、ほかでもなくソ連共産党指導部のふるまいこそ、偉大なソ連とソ連共産党に大きな恥をかかせ、ソ連人民の根本的利益にゆゆしい損害をこうむらせた。これこそ真正正銘の、かけ値なしの反ソである。

こうした状況のもとでは、中国共産党その他のマルクス・レーニン主義政党とマルクス・レーニン主義者は、マルクス・レーニン主義の純潔と國際共産主義運動の団結をまもるため、プロレタリア國際主義の原則にもとづいて、当然ソ連共産党指導部の修正主義と分裂主義の路線に厳正な批判をくわえないわけにはゆかない。われわれが反対するのはソ連共産党指導部の修正主義と

分裂主義のあやまちだけである。われわれがそうするのは、レーニンのきずきあげたソ連共産党をまもり、最初の社会主義国ソ連とソ連人民の根本的利益をまもるためにほかならない。それをどうして「反ソ」などということができたらうか。

ソ連をまもるかソ連に反対するかの分水嶺は、マルクス・レーニン主義の路線とプロレタリア国際主義の原則を真にまもるかまもらないかということにあり、ソ連共産党、ソ連、ソ連人民の根本的利益を真にまもるかまもらないかということにある。ソ連共産党指導部の修正主義と分裂主義を厳粛に批判することは、ソ連をまもることにはかならない。逆に、ソ連共産党指導部が修正主義と分裂主義の路線を實行していることこそ、真にソ連に反対しているのである。このようなあやまった路線に追隨し、屈従することは、ソ連を真にまもるのではなく、ソ連共産党指導部をたすけてソ連人民の根本的利益をそこなうだけである。

われわれはここで、二十世紀のはじめレーニンがドイツ社会民主党の指導者たちにたいしてとった態度を思いおこしてみるのも有益なことであろう。当時、ドイツ社会民主党は第二インターのもっとも強大な、もっとも影響力のある党であった。だが、いったんドイツ社会民主党の指導者たちの日和見主義に気づくと、レーニンはすぐロシアの社会民主主義者にむかつて、「ドイツ社会民主党のもっとも不面目なものを手本とす」べきではないと指摘した。レーニンはまた、

「もしもわれわれがなおマルクスの精神に忠実であり、ロシアの社会主義者をたすけて現代労働運動の任務をになわせようと思うなら、われわれはなんらのためらいもなく率直にドイツの指導者たちのあやまちを批判すべきである」(レーニン「シエトウツトガルトの国際社会主義者大会」、

「労働組合と党との関係にかんするヴェイノフ(ア・ヴェ・ルナチャルスキー)の小冊子の序文」、『レーニン全集』第一三巻)とのべた。

このレーニンの精神にもとづいて、われわれはソ連共産党指導部に忠告する。きみたちももしも自己の修正主義のあやまちをあらためないなら、ソ連共産党、ソビエト国家、ソ連人民の利益のため、また社会主義陣営と国際共産主義運動の利益と団結のため、われわれはひきつづき「なんらのためらいもなく率直に」きみたちを批判するだろう、と。

いわゆる「指導権争い」を反ばくする

ソ連共産党指導部は、われわれがかれらの修正主義と分裂主義の路線を批判し、これに反対しているのは、「指導権を奪おう」としているのだといっている。

なによりもまず、われわれはソ連共産党指導部にたずねたい。きみたちはわれわれが「指導権を奪おう」としているといっているが、いったいだれから奪うというのか。指導権はいついだ

れの手にあるというのか。国際共産主義運動にはすべての兄弟党のうえに君臨する指導権なるものが存在し、そして、その指導権はきみたちの手にあるとでもいうのだろうか。

見うけるところ、ソ連共産党指導部はたしかに自分しんを全世界の兄弟党のうえに君臨する当然の指導者とみなしているようである。ソ連共産党指導部の論理によると、かれらの綱領、決議、声明はみな金科玉条である。フルシチョフの口にすることは、一字一句、それがいかにまぢがいだらけのでたらめきわまるものでも、みな勅旨である。すべての兄弟党はただおとなしくそれに服従し、それを忠実にまもるほかはなく、それに批判をくわえたり、反対したりすることは絶対にゆるされない。これこそ真正正銘の覇道であり、真正正銘の封建君主専制の思想である。

だが、われわれはソ連共産党指導部につげたい。国際共産主義運動は封建的な集団ではない。すべての兄弟党は、大きな党であれ小さな党であれ、新しい党であれふるい党であれ、政権をにぎっている党であれ政権をにぎっていない党であれ、すべて自主独立で、一律に平等である。兄弟党のいかなる国際会議でも、またそれぞれの国の兄弟党が一致して採択したいかなる決議でも、兄弟党のあいだに上級の党と下級の党とか、指導する党と指導される党とか、おやじの党とむすこの党とかの区別があるとはきめていないし、ソ連共産党指導部が兄弟党の上皇であるとはきめていない。

ていない。

国際プロレタリアートの革命運動の歴史をみると、革命の発展が一樣でないため、それぞれの歴史的時期にあれこれの国のプロレタリアートとその政党が運動の先頭に立ったことはある。

マルクスとエンゲルスも指摘しているように、イギリスの労働組合運動とフランスの労働者の政治闘争はあいついで各国のプロレタリアート運動の先頭に立った。パリ・コミューンが失敗してのち、エンゲルスは、「いま、ドイツの労働者はプロレタリアートの闘争の先頭に立っている」といったことがある。エンゲルスはまた、ドイツの労働者にとつて、「いったい事態がかれらにこうした荣誉ある地位をいつまでしめることをゆるすであろうか、これは予断しえないことである」。「だが、なによりもまず真の国際主義的精神を守らなければならない。こうした精神はいかなる愛国的排外主義をも出現させないであろうし、プロレタリアート運動におけるいかなる民族のあらたな進展をも歓迎するであろう」(エンゲルス「ドイツ農民戦争への序文」『マルクス・エンゲルス二巻選集』第二巻)といった。

二十世紀のはじめ、ロシアの労働者は国際プロレタリア運動の先頭に立ち、史上はじめて勝利したプロレタリア革命をなした。

一九一九年、レーニンは、「革命的プロレタリアートのインターナショナルの指導権は一時

(もちろん短い時期だが)ロシア人の手に移った。ちょうど十九世紀のそれぞれの時期にあいついでイギリス人、フランス人、ドイツ人の手中にあつたように」(レーニン『第三インターナショナルとその歴史上の地位』『レーニン全集』第二九卷)とのべた。

エンゲルスが「先頭」といい、レーニンが「指導権」といつていたものは、国際労働運動の先頭に立つ党が他の兄弟党にたいして采配をふつてよいことをけつして意味してはいないし、他の兄弟党がこの党に服従しなければならぬということもけつして意味してはいない。ドイツ社会民主党が運動の先頭に立っていたころ、エンゲルスは、「この党はヨーロッパのプロレタリアートを代表してものをいう権利をもっていない。とくに、まちがったことをいう権利はもっていない」(『マルクス・エンゲルス書簡集』)といった。ロシアのボルシェビキ党が運動の先頭に立っていたころ、レーニンは、「他国の発展のすべての段階を予測しておかねばならず、けつしてモスクワから采配をふつてはならない」(レーニン『ロシア共産党(ボ)第八回大会で党綱領についての報告』『レーニン全集』第二九卷)といった。

エンゲルスとレーニンのいうこうした先頭の地位にしても、長いあいだ一定不変のものではなく、条件の変化にともなつて移り変わるものである。こうした移り変わりは、なんらかの人、なんらかの政党の主観的な願ひによつてきまるのではなく、歴史の生みだすさまざまな条件によつてきまるのである。条件が変われば、他の党が運動の先頭に立つこともありうる。もしも先頭の地位にあつた党が修正主義の道にふみこめば、それがもつとも大きく、もつとも影響力をもつ党であつても、必然的に先頭の地位をうしなつてしまふ。かつてのドイツ社会民主党がそうであつた。

国際共産主義運動の歴史には、世界各国の共産党にたいし集中的な指導をおこなうコミンテルンが存在したこともある。コミンテルンは各国共産党の創立と成長にたいし歴史的な意義をもつ大きな役割をはたした。だが、各国の共産党が成長し、国際共産主義運動の情勢がますます複雑になつてくると、コミンテルンの集中的な指導は不必要となり、また不可能となつた。一九四三年、コミンテルンの常任執行委員会はコミンテルンの解散を提案する決定のなかでつぎのように指摘した。「それぞれの国の内部の状況と国際情勢がいよいよ複雑となつて以上、ある国際的中心が個々の国の労働運動のさまざまな問題を解決しようとすれば、のりこえることのできない障害につきあたることになるだろう」と。この決定が実情に即した正しいものであつたことは、歴史の立証するところである。

いま、国際共産主義運動のなかでは、だれがだれを指導する権利をもつかという問題はまったく存在しない。兄弟党のあいだの関係は、自主独立で、まったく平等であるとともに、また互い

に団結する關係でなければならぬ。共通に關係のある問題については、兄弟党は話し合いを通じて見解を統一し、共同の目標をめざすたかにおける共同の行動を調整すべきである。兄弟党の相互關係についてのこれらの準則は、一九五七年の宣言にも一九六〇年の声明にもはっきりと規定されている。

ソ連共産党指導部は國際共産主義運動の指導者をもって自任し、他の兄弟党をすべて指導されるものとみなしている。これは宣言と声明に規定されている兄弟党間の關係についての準則にまったくそむくものである。

もちろん、歴史の生みだすさまざまな条件によつて、それぞれの兄弟党がおかれている状況はまったく同じわけではけつしてない。革命の勝利をおさめた党は、革命の勝利をおさめていない党と異なるし、まさに革命の勝利をおさめた党は、あとで革命の勝利をおさめた党と異なる。だが、こうした区別は、すでに勝利をおさめた党、とりわけまさに勝利をおさめた党に、他の兄弟党を支援するいっそう大きな國際主義的義務を負わせるだけであつて、この党に他の兄弟党を支配する権力をさずけるものではけつしてない。

ソ連共産党はレーニンとスターリンがきざぎざあげた党であり、また最初にプロレタリア革命の勝利をおさめ、プロレタリアート独裁を実現し、社会主義建設をおこなつた党でもある。道理か

らえば、ソ連共産党はレーニンとスターリンの革命的伝統をうけついで、他の兄弟党、兄弟國を支援するいっそう大きな義務をにない、國際共産主義運動の先頭に立つのが当然である。

ほかでもなく、歴史の生みだすこれらの条件を考慮して、中国共産党はソ連共産党がこの榮譽ある歴史的使命をになうことを心からのぞんでいる。一九五七年の兄弟党モスクワ會議のさい、中国共産党代表團は、社会主義陣營はソ連を先頭とするということを強調した。なぜなら、當時、ソ連共産党指導部はいくつかのあやまちをおかしたとはいへ、けつきよく各国兄弟党が共同でさだめたモスクワ宣言をうけいれたからである。われわれが提出した、社会主義陣營はソ連を先頭とするという意見も宣言のなかに書きこまれていた。

われわれの考えでは、こうした先頭としての地位は、兄弟党が一律に平等であるという原則とけつして矛盾しない。それはソ連共産党が他の兄弟党を支配する権利をもつということをけつして意味してはならず、ただソ連共産党がいっそう大きな責任と義務をもつことを意味しているにすぎないのである。

だが、ソ連共産党指導部はこの「先頭として」の地位にけつして満足してはいない。フルシチン『フジシ、たびたびこの点について不平をならべている。かれはいう。「『先頭とする』といつても、物質面でわれわれになにもたらさうするだろうか。それはわれわれにミルクやバターも

あたえないし、ジャガイモ、野菜、住宅もあたえない。それなら、道義上われわれになにをもたらしうるだろうか。なにもあたえないのだ！」^⑩と。かれはまた、つぎのようにもいつている。「われわれはこの『先頭』などというものを頂戴してなんの役にたつだろうか。この『先頭』などくたばってしまえ！」^⑪と。

ソ連共産党指導部は、口先では「先頭として」の地位などいらないといながら、実際にはすべての兄弟党のうえに君臨する特権を要求している。かれらは自分じしんに、マルクス・レーニン主義の路線を實行し、プロレタリア国際主義の義務を履行する面で国際共産主義運動の先頭に立つことを要求しているのではなく、すべての兄弟党がかれらの指揮棒にしたがい、かれらのうしろについて修正主義と分裂主義の道をあゆむことを要求しているのである。

ソ連共産党指導部は、修正主義と分裂主義の道へふみこんでから、国際共産主義運動のなかで「先頭として」の地位をうしなつたのはいうまでもない。現在のソ連共産党指導部について、まだ「先頭」というなら、それは修正主義の先頭であり、分裂主義の先頭である。

さらに、各国の共産主義者が直面している問題、国際共産主義運動せんたいが直面している問題は、いったいだれがだれを指導するのかという問題ではなく、いったいマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を堅持するのか、それともソ連共産党指導部の修正主義と分裂主義

に屈服するかというこの問題である。ソ連共産党指導部は、われわれが「指導権を奪おう」としていると同傷しているが、実際にはかれらがあくまでわれわれと他のすべての兄弟党をかかれらの修正主義と分裂主義の指導にしたがわせようとしているのである。

「いわゆる」多数の意志に反抗している」

「国際的規律を破壊している」を反ばくする

一九六〇年いろいろ、ソ連共産党指導部が中国共産党を攻撃するのにもっともよくつかっているひとつの論拠は、いわゆる「多数の意志に反抗している」、「国際的規律を破壊している」ということである。ここで、われわれとソ連共産党指導部がこの問題でおこった論争をふりかえって見るのも有益なことであろう。

一九六〇年六月、ソ連共産党指導部はブカレスト会談中に、不意打ちの手をうって、中国共産党を攻撃する通知をばらまき、そのうえ、多数をかりあつめて中国共産党を屈服させようとかわだてた。かれらのこのくわだては成功しなかった。しかし、この会談のうちに、ソ連共産党指導部は兄弟党間の関係で少数は多数に従わなければならないという論点をもちだし、数十もの党の代表がすべて中国共産党の観点に反対であると強調して、中国共産党にブカレスト会談で「一致

して表明した意見と意志」を「尊重」させようとした。

中国共産党中央委員会は、ソ連共産党中央委員会の通知にたいする一九六〇年九月十日づけの回答のなかで、このあやまった論点に反論をくわえた。中国共産党中央委員会はつぎのように指摘した。「マルクス・レーニン主義の根本的原則問題にたいするばあい、いったいだれが正しくだれがあやまっているかということは、どんな状況のもとでもすべて多数か少数かということでは判断できるとはかぎらないのである。真理は結局真理である。一時的な多数は究極的には誤りを真理に変えることはできないし、一時的な少数も究極的には真理を誤りに変えることはできないのである」、と。

だが、ソ連共産党中央委員会は一九六〇年十一月五日づけの書簡で、ふたたび国際共産主義運動のなかで少数が多数に従うというあやまった論調をくりかえすとともに、レーニンが『デューマ七人組』のなかでのべている一節を引用して、中国共産党が「大多数の兄弟党の意見を尊重しないのは、事実上国際共産主義運動の統一と団結に反対しているのである」と非難した。

一九六〇年の兄弟党のモスクワ会議に出席した中国共産党代表団は、この会議の席上で一歩すすんでソ連共産党指導部のこうしたあやまった論調に反論をくわえた。中国共産党代表団はつぎのように指摘した。当面の具体的な条件のもとで、すなわち、コミンテルン式の集中的な指導が

存在もしていないし、また存在すべきでもないという条件のもとで、兄弟党のあいだの関係で少数が多数に従うという原則を引用するのはまったく正しくない。ひとつの党の党内では、少数が多数に従い、下級が上級に従うという原則を順守すべきであるが、各兄弟党のあいだではこの原則を実行することはできないのである。各兄弟党のあいだの関係は、それぞれが独立をもちながらも互いに団結するという関係であり、そこには少数が多数に従うという関係もなければ、下級が上級に従うという関係はなおさらないのである。兄弟党に關係のある共通の問題については、ただ話し合いの原則にもとづき、討議をへて、意見の一致をはかることができるだけである。

中国共産党代表団はつぎのように指摘した。ソ連共産党中央委員会の書簡のなかでもちだされている少数が多数に従うという原則は、あきらかに話し合いで意見の一致をはかるという原則を根本的に否定したものである。中国共産党代表団はつぎのように問いただしている。「ソ連共産党中央委員会はいったいどんな超党的な党規約にもとづいてこのような組織原則をもちだしたのか。いつ、どこで、各国共産党と労働者党がこのような超党的な党規約を採択したのか」、と。

中国共産党代表団はつづいて、ソ連共産党中央委員会の書簡がレーニンの『デューマ七人組』のなかのロシア社会民主労働党の党内問題にかんする一節を引用したとき、こともあろうに故意

に原文にある「ロシア」ということばを削除し、ひとつの党の党内における少数が多数に従うという原則を、兄弟党間の関係の面にまでもちこもうとしていることを暴露した。

中国共産党代表団はさらにつぎのように指摘した。「ひとつの党の内部においてさえ、組織のうちでは少数が多数に従うという原則をまもらなければならないが、思想上、認識上の正しさと誤りを、どんなときでもすべて多数か少数かで判断できるとはいえないのである。まさしくこの『デューマ七人組』の論文のなかで、レーニンは、当時デューマ内の党議員団に属していた七人の清算主義者が一票の多数を利用して少数派の地位にあったマルクス主義者をおさえつけた卑劣な行為をきびしく非難してつぎのように指摘したのである。七人の清算主義者が多数をしめたとはいえ、かれらは、マルクス主義の精神にもとづいて組織された先進的な、自覚のあるロシアの労働者の大多数の統一的意志、統一的決議、統一的戦術を代表することはできない。従って統一にかんするかれらのすべてのわめきはまったくの虚偽にすぎない、レーニンは、『党派性をなくした七人が六人のマルクス主義者のみこんでしまおうとするばかりか、これを統一だと言い張ろうとしている』と語った。レーニンはまた、デューマ内の党議員団の六人のマルクス主義者の行動こそ『プロレタリアートの大多数の意志に合致したものであり』、ただ七人の代表が『圧制的な政策を放棄する』ことによつてのみ、はじめて一致団結をたもつことができる」と語った。

中国共産党代表団はまたつぎのようにならした。レーニンのことばが明らかにしているように、「ひとつの党のひとつの細胞のなかでさえ、多数が永遠に正しいとはかぎらない。これに反して、場合によつては、多数のものが『圧制的な政策を放棄する』のでなければ、一致団結をたもてないこともある。まして、兄弟党のあいだにおいてはなおさらそうではないか。ソ連共産党中央委員会の同志はこのように文章の意味さえはつきり理解もせず、こそくさとレーニンのことを引用し、そのうえ故意に重要なひと言を削除したが、それでもじぶんの目的を達していないのである！」

われわれが一九六〇年の兄弟党のモスクワ会議における中国共産党代表団の若干の発言をくわしく引用したのは、「多数の意志に反抗している」とわれわれを攻撃しているソ連共産党指導部のあやまった論調が、ずっと以前にわれわれによつて完膚なきまでに反ばくされてきていることを説明するためである。中国共産党とその他のマルクス・レーニン主義的な兄弟党があくまでソ連共産党指導部のこうしたあやまった論調に反対したからこそ、兄弟党は話し合いで意見の一致をはかるといふ原則が一九六〇年の声明のなかに書きこまれたのである。

ソ連共産党指導部はいまも相変わらず、「少数が多数に従う」ということをしきりにわめきつけているが、これはかれらが各国兄弟党の自主独立と平等の地位を否定し、兄弟党のあいだの

話し合いで意見の一致をはかるといふ原則を解消しようとしていることを物語っているにすぎない。かれらは「多数」という看板のもとで、いくつかの兄弟党を脅迫してかれらの意志におとなしく従わせ、そのうえ、こうした虚勢を利用して、マルクス・レーニン主義的な兄弟党を攻撃しようとするにやまがない。ソ連共産党指導部のこのような行動自体が、つまりセクト主義と分裂主義であり、宣言と声明にそむくものである。

こんにち、各国共産党のあいだで、もし国際的規律について語ろうとするならば、それはほかでもなく、宣言と声明に規定されている兄弟党間の相互関係についての準則を順守することである。われわれがすでに多くの事実をあげて証明しているように、ほかでもなくソ連共産党指導部こそ、かならず順守しなければならないこうした準則を破壊したのである。

ソ連共産党指導部が「多数」とか、「少数」とかにどうしても分けようというならば、われわれは率直にソ連共産党指導部につげたい。われわれはきみたちが多数であるとは認めない、と。きみたちがたのみにしている「多数」はニセものである。ほんとうの多数はきみたちの側にはない。マルクス・レーニン主義を堅持している兄弟党の党員が国際共産主義の隊列のなかで少数だなどといえるだろうか。きみたちときみたちの追隨者たちが大衆からひどく浮きあがっているのに、きみたちのあやまった路線に賛成しない広はんな党員と広はんな人民をきみたちのいわゆる

「多数」のなかに入れることができるなどといえるだろうか。

根本的な問題は、広はんな人民大衆の側に立っているのはだれか、かれらの根本的利益を代表しているのはだれか、かれらの革命的意志を反映しているのはだれかということである。

一九一六年、レーニンは当時のドイツ社会民主党の状況にふれてつぎのようにのべた。「リープクネヒトとリュールレのたった二人が百八人に立ちむかつたのであるが、この二人はいく百千万の人びとを代表しており、搾取されている大衆を代表しており、大多数の人民を代表しており、人類の未来と、日ましに発展し、成熟している革命を代表している。ところが、あの百八人はプロレタリアートの隊列のなかのひとにぎりのお世辞のうまいブルジョアジーの手先を代表しているにすぎない」(レーニン『ボリス・スバランへの公開状』、『レーニン全集』第三巻)

こんにち、一時まだ目ざめてはいないが、いずれは目ざめるにちがいない人びとをふくむ、全世界の人口の九〇パーセント以上をしめる人民大衆は、みな革命を要求している。ほんとうに多数派の地位をしめているのは、かれらの根本的な利益を裏切っているひとにぎりの修正主義者ではなく、かれらの根本的な利益を代表しているマルクス・レーニン主義の革命党とマルクス・レーニン主義者である。

いわゆる「兄弟党の反党グループを支持している」を反ばくする

ソ連共産党指導部はソ連共産党中央委員会の公開書簡のなかで、「中国共産党指導部はアメリカ、ブラジル、イタリア、ベルギー、オーストラリア、インドなどの国の共産党のさまざまな変節分子の反党グループに働きかけ、これを支持して反党活動をおこなわせている」と、われわれを中傷している。

事実の真相はどうか。

事実是这样である。ここ数年らい、いくつかの国の共産党に分裂現象が発生したが、これはソ連共産党指導部が強引に修正主義と分裂主義の路線をおしすすめた結果によるところが多いのである。

いくつかの共産党の指導部は、ソ連共産党指導部がかれらにおしつけた修正主義の路線をうけ入れたか、あるいはかれらの修正主義の路線がソ連共産党指導部の激励をうけたために、自国の革命運動をわき道にそらせ、自国の革命事業に損害をこうむらせた。かれらは国際共産主義運動の二つの路線の闘争のなかで、ソ連共産党指導部のあとに追随し、旗振り役をつとめて、国際共産主義運動の団結に消極的な役割をはたしている。こうした状況は、これらの党の内部における

広はんな不満をひきおこさないわけにはいかないし、党内のマルクス・レーニン主義者の抵抗と反対をひきおこさないわけにはいかない。

ソ連共産党指導部のこれらの追隨者は、自己の党内でも、お手本どおりにふるまって、分裂主義の政策を実行している。かれらは民主集中制の原則にそむいて、党内における路線の相違について、また当面の国際共産主義運動の重大問題について、正常な討議をおこなうのをゆるさないばかりか、不法な手段にうつつたえて、原則を堅持する共産主義者を排せきし、打撃し、ひいては除名さえしている。このことは、不可避免的にこれらの党の党内における二つの路線の闘争にとくに鋭いかたちをとらせている。

根本的にいって、これらの共産党の党内闘争の性格は、マルクス・レーニン主義の路線をえらぶか、それとも修正主義の路線をえらぶかという闘争であり、共産党をほんとうのプロレタリアートの前衛、プロレタリアートの革命党に建設してゆくか、それとも共産党をブルジョアジーの従僕、社会民主党の変種にするかという闘争である。

ソ連共産党指導部はソ連共産党中央委員会の公開書簡のなかで、アメリカ、ブラジル、イタリア、ベルギー、オーストラリア、インドなどの国の共産党の党内闘争の真相を歪曲している。かれらはもつとも悪らつなことをもちいて、これらの国の党の修正主義グループに排せきされ、

打撃されたマルクス・レーニン主義者をのしつてゐる。

ソ連共産党指導部はこのように黒白を転倒することによつて、これらの共産党の党内闘争の真相をおおいかくし、かざりたて、変えあらためることができるとでもいうのだろうか。できない、できない、絶対にできない。

ベルギー共産党の党内闘争をとりあげて話してみよう。

ベルギー共産党の内部のくいちがいは、なが年にわたるものである。この党のものと指導グループがますます深く修正主義のどろ沼におちこみ、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を放棄するにつれて、党内の闘争はますます激化してきたのである。

ベルギー共産党の修正主義グループは、ハンガリーの反革命反乱事件のとき、こともあろうに声明を発表して、ソ連がハンガリーの勤労人民をたすけて反乱をしずめたことを非難した。

この修正主義グループは、コンゴ人民がベルギー植民地主義者の血なまぐさい弾圧に武力で反抗したことに反対し、アメリカ帝国主義が国連を利用してコンゴの民族独立運動に干渉し、それを弾圧したことに賛成した。かれらは耻知らずにも、自分が率先して国連に「すみやかに全面的に国連の決議を実行することを望む」^⑬とよびかけたことを誇りにしている。

この修正主義グループは、チトー一味の修正主義的綱領は「マルクス・レーニン主義を豊富に

する思想をふくんでいる」^⑭と称賛している。

この修正主義グループは、ほしのままに一九六〇年の声明をそしり、この声明の内容は混乱しており、「二〇行ごとに、この声明の総路線にそむく語句が見られる」^⑮といっている。

この修正主義グループはまた、一九六〇年のすえと一九六一年のはじめのベルギー労働者の大ストライキのさい、労働者が軍隊と警察の弾圧に反抗したことは「軽率で、無責任な行動」^⑯であるなどと非難し、労働者の闘争意欲を瓦解させようとした。

ベルギー労働者階級の利益を裏切り、国際プロレタリアートの利益を裏切るこの修正主義グループの一連の行為にたいして、グリッパ同志をはじめとするベルギーのマルクス・レーニン主義者がきびしい闘争をおこなうのは理の当然である。かれらは党内の修正主義グループの誤りをあばき、それに批判をくわえ、だんこととして修正主義路線に抵抗し、反対した。

ここからみても、ベルギー共産党内の闘争が、マルクス・レーニン主義と修正主義との二つの路線の闘争であることがわかる。

ベルギー修正主義グループは党内闘争にどう対処しているか。かれらはセクト主義と分裂主義の政策を実行し、不法な手段にうつつたえてマルクス・レーニン主義の原則的な立場を堅持している共産主義者たちを打撃し、排せきしている。ベルギー共産党第十四回大会で、かれらはグリッ

パ同志らの意見を聞くことを拒否し、広はん党員大衆の反対をかえりみず、グリッパ同志らを党から除名すると、不法にも公表した。

こうした状況のもとで、グリッパ同志をはじめとするベルギーのマルクス・レーニン主義者は、革命路線を堅持し、ベルギー共産党のものと指導グループの修正主義と分裂主義の路線にだんこととして反対し、ベルギー共産党を再建するためにたかたかっている。これはまったく正しい、なんら非のうちどころのないことではなからうか。

ソ連共産党指導部は公然とベルギー共産党の修正主義グループを支持し、激励して、ベルギーのマルクス・レーニン主義者に打撃をあたえ、それを排せきさせているが、このことは、かれら自身こそ兄弟党内の分裂をつくりだした者であることを暴露するだけである。

インド共産党についていえば、そこで発生した事態は、さらに重大な性格をおびたものである。

われわれは『人民日報』編集部が一九六三年三月九日に発表した『修正主義者の鏡』という論文のなかで、大量の事実にもとづいて、ダンゲをかしらとする裏切り者一味が、すでにマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を裏切り、インドのプロレタリアートとインド人民の革命事業を裏切つて、民族的排外主義と階級的降伏主義の道にふみこんでいることを指摘した。

かれらは、インド共産党の指導権をのっとり、現にインドの大ブルジョアジー、大地主の意志に従つて、インド共産党を大ブルジョアジー、大地主の利益を代表しているネール政府の従僕に変えつつある。

その時らしい、インド共産党の状況にどんな変化がおこったか。

全世界の人びとが見てとつていえるように、ダンゲ一味は裏切り者の道をあゆみつつづけている。かれらはひきつづき階級協調を宣伝し、ネール政府を通じてインドの「社会主義」を「実現」することを宣伝している。かれらはネール政府のぼう大な軍備拡張・戦争準備の予算と人民の血と汗をしぼりとする措置を積極的に支持している。かれらは、一九六三年八月にボンベイでおこったネール政府のむごいとりたて政策に反対する百万人の大ストライキを破壊した。かれらは、逮捕された共産党員の釈放を要求するカルカッタの十万人の大衆集会を妨害した。かれらは気遣いじみた反中国活動をつづけ、ネール政府の拡張主義政策を支持している。かれらはアメリカ帝国主義によりすぎるネール政府の政策に追従している。

裏切り者の正体が暴露されるにつれて、ダンゲのようなやからは、インド共産党の広はん党員大衆の反対と抵抗をますますうけている。ますます多くのインドの共産主義者が、ダンゲのよくなやからはインド共産党とインド民族のわざわいであるということをはっきり見てとるよう

なっている。いま、ますます多くのインドの共産主義者はインド共産党の光榮ある、戦闘的な革命的伝統をふたたびもり立てるためにたたかっている。かれらはインドのプロレタリアートとインド人民のほんとうの代表であり、希望である。

ソ連共産党指導部は、中国共産党が「変節分子」と「裏切り者」を支持しているとやっきになってわめきたてているが、ダンゲ一味のような真正正銘の変節分子と裏切り者を支持しているのは、ほかでもなく、まさにソ連共産党指導部なのである。

ソ連共産党指導部は、修正主義や分裂主義と敢然とたたかう勇氣をもっている多くの国ぐにの共産主義者をすべて「変節分子」、「裏切り者」、「反党分子」などとののしっている。だが、これらの共産主義者はいったいなにをしたのか。かれらはマルクス・レーニン主義を堅持し、革命的な党と革命的な路線をもつことを堅持したにすぎないのである。ソ連共産党指導部は、悪ばを浴びせればこれらの国ぐにのマルクス・レーニン主義者のどきもを抜くことができ、かれらに正しい路線を堅持し、あやまった路線に反対する闘争を放棄させ、この闘争を最後までおしすめないようにさせることができることも本気に考えているのだろうか。こうした身がってなおもわくはけつして実現できないのである。

古今を通じて、ほんとうの革命家、ほんとうのプロレタリアートの革命戦士、ほんとうのマルクス・レーニン主義者、つまり戦闘的な唯物論者は、なにものをもおそれないものであり、反動派と修正主義者の悪ばをおそれないものである。なぜなら、かれらは、未来を代表しているのは、見かけはたいへんおそろしい反動派や修正主義者のようなとてつもない大物ではなく、自分たちのような小人物であることを知っているからである。すべての大人物はみな小人物がなり変わったものである。最初は見かけたところきわめてくだらぬ人間も、かれらが真理をにぎっており、大衆に擁護されているかぎり、最後にはかならず勝利するのである。レーニンと第三インターがつまりそうであった。ところが真理を失い、大衆の擁護を失っては、有名な大人物や大きな団体でも必然的に衰亡し、くだらぬもの、悪名高いものになってしまう。ベルンシュタイン、カウツキー、第二インターがつまりそうであった。総じて事物は一定の条件のもとでその反対の側に転化するのである。

共産主義者は革命をおこなうものである。もし革命をおこなわないならば、それはマルクス・レーニン主義者ではなくて、修正主義者かまたは他のなにかである。マルクス・レーニン主義者としての共産主義者が革命の立場を堅持し、修正主義に反対することは、至当不易の道理である。マルクス・レーニン主義的政党として、だんごと革命家を支持し、修正主義に反対する共産主義者を支持することは、これまた同様に理の当然である。

中国共産党は従来から自分の立場をおおいかくしたことはなかった。われわれは、マルクス・レーニン主義を堅持する全世界のすべての革命的な同志を支持している。国際共産主義運動のなかで、われわれは修正主義者とまだ往来しているのに、なぜマルクス・レーニン主義者とはどうしても往来できないというのか。ソ連共産党指導部は、われわれが各国のマルクス・レーニン主義者を支持しているのを分裂主義的活動をおこなっているといいくるめてはいるが、われわれから見ると、これこそ、われわれがつくさなければならぬプロレタリア国際主義的義務である。

各国のマルクス・レーニン主義者は強暴をおそれず、困難にめげず、真理を堅持し、敢然としてたたかい、共産主義戦士の偉大な革命的気概をしめしている。グリッパ同志らを代表とするベルギーの共産主義者、アマゾナス、グラボイス同志らを代表とするブラジルの共産主義者、ヒル同志らを代表とするオーストラリアの共産主義者、クマラシリ、サンムガタサン同志らを代表とするセイロンの共産主義者、およびインド、イタリア、フランス、アメリカなど多くの国ぐに共産党の党内と党外のマルクス・レーニン主義者は、つまりこうした英雄的な戦士である。かれらはマルクス・レーニン主義の革命的理論を堅持し、マルクス・レーニン主義の原則性をもったプロレタリアートの前衛としての革命党を建設することを堅持し、自国のプロレタリアートその他の勤労人民の根本的な利益に合致した革命的路線を堅持し、国際プロレタリアートの共同事

業にたいして重要な貢献をした。かれらが全世界における共産主義の勝利のためにたたかっているあらゆる人びとから尊敬、同情、支持をうけるのは理の当然である。

要するに、全世界のどんな国、どんな地域でも、抑圧の存在するところでは、かならず反抗がおこる。修正主義者のいるところでは、かならずマルクス・レーニン主義者がかれらに對抗している。党から除名するといった分裂主義的なやり方でマルクス・レーニン主義者に対処しているところでは、かならずすぐれたマルクス・レーニン主義者が生まれ、強大な革命政党が生まれるのである。いま、現代修正主義者の予想もしていなかった変化がおこりつつある。かれらは現に自己の対立面をつくりだしつつあり、そして、最後にはかならずかれら自身がつくりだした対立面によってほうむりさらされるであろう。これは必然的な客観的法則である。

当面の公然たる論戦

当面の国際共産主義運動のなかでの大論戦は、とどのつまり、マルクス・レーニン主義が必要なのか、それとも修正主義が必要なのかという論戦であり、プロレタリア国際主義が必要なのか、それとも大國排外主義が必要なのかという論戦であり、団結が必要なのか、それとも分裂が必要なのかという論戦である。こうした根本的な原則問題にかかわる論戦は、早くもソ連共産党

第二十回大会の終了後始められ、相当ながい期間にわたって兄弟党の内部での会談のなかでおこなわれていたが、二年あまりまえから公開のかたちをとるにいたったのである。

周知のように、国際共産主義運動の公然たる論戦は、ソ連共産党指導部がまさきにひきおこしたものであり、ソ連共産党指導部があくまですすめようとしているものである。

一九六一年十月のソ連共産党第二十二回大会で、ソ連共産党指導部はアルバニア労働党にたいして公然たる攻撃をおこなった。当時、ソ連共産党のこの大会に出席した中国共産党代表団団長周恩来同志はいさつのなかで、ソ連共産党指導部のこうしたやり方に反対して、それはけつして厳粛なマルクス・レーニン主義的態度ではないと指摘した。ところが、ソ連共産党指導部はわれれにどう答えたか。かれらは、自分たちが公然たる論戦をひきおこしたのは「まったく正しく行動した」⑩のであり、「唯一の正しい、真のマルクス・レーニン主義的な原則的立場」⑪であるといった。

そのご、一九六二年一月に、ベトナム労働党が「それぞれの党はラジオや新聞、雑誌をつうじてたがいに攻撃しあうのを停止すべきである」と提案した。この提案は、中国共産党、アルバニア労働党その他の兄弟党の支持をえた。だが、ソ連共産党指導部は事実上、公然たる論戦の停止にたいしてはつきりとした義務を負うことを拒否した。ソ連共産党指導部はアルバニア労働党に

たいする公然たる攻撃をずっと停止しないどころか、一九六二年のすえから一九六三年のはじめにかけてあいついでひらかれたヨーロッパの五つの兄弟党の大会で、中国共産党にたいする公然たる攻撃を策動し、いっそう大がかりな公然たる論戦をひきおこした。これによって、われわれは攻撃者にたいしておおやけの回答をおこなわざるをえなくなったのである。

一九六三年三月、兄弟党の攻撃にたいしてわれわれがまだ回答し終わっていないかたとはいえ、中国共産党中央委員会はソ連共産党中央委員会あての返書のなかで、三月九日から新聞、雑誌のうえでおおやけの回答をおこなうことは一時停止する、ただし、おおやけの回答をおこなう権利は留保するということを宣言した。これは、話し合いで開催をきめていた中ソ両党の会談にこのましいふんい気をつくりだすためであった。ところが、ソ連共産党指導部はこともあろうに中ソ両党会談の直前、一歩進んで声明を発表し、決議を採択するという方式をとって、中国共産党を名指して公然と攻撃したのである。

七月十四日、中ソ両党の代表団がモスクワで会談をおこなっている最中、ソ連共産党中央委員会はソ連の各級の党組織と全共産黨員への公開書簡を発表して、事実を歪曲し、是非を転倒し、はては人心をまどわす手段さえとり、さまざまな悪口をならべたてて、ほしいままに中国共産党と毛沢東同志を攻撃した。こうして、ソ連共産党指導部はさらに空前の規模をもった公然たる論

戦をひきおこしたのである。

七月十五日から、ソ連共産党指導部は、政府の声明、指導者の演説、さまざまな集会をはじめ、論文を発表するなど利用できるいろいろな形式をとり、また、中央の新聞、雑誌から、地方の新聞、雑誌にいたるまで、ラジオからテレビ番組にいたるまで、あらゆる宣伝機関を動員して、中国を最大の敵として誹謗と攻撃をくわえた。ソ連の中央クラスの二六の新聞、雑誌についての統計によると、七月十五日から十月末にかけて、合計一一一九編にのぼる編集部の論文や社説、短評、署名入りの論文、読者の來信、漫画などを掲載し、中国共産党とその指導者毛沢東、劉少奇、周恩來同志らを名指して攻撃した。地方の新聞、雑誌については、加盟共和国の五種類の機関紙誌についての一応の推計によると、同じ期間に七二八編にのぼる反中国の資料が掲載された。

これらの反中国の宣伝資料のうち、比較的重要なものはずべて、われわれは新聞に発表した。そのうち、ソ連共産党中央委員会の公開書簡は前後二回にわたって全文を掲載するとともに、十数カ国のことばで全世界に放送し、この公然たる論戦に関心をよせている人びとがソ連共産党指導部の観点を理解するのに役立つようにした。ソ連側の反中国の論文はひじょうに多く、しかも、そのほとんどが干編一律であり、われわれの新聞の紙面にもかぎりがあるので、全部を掲載

することができなかった。われわれの出版部門はすでにこれらすべての論文をあつめており、本にまとめてつぎつぎと出版することになっている。

ソ連側はすでに反中国の論文と資料を二〇〇〇編近くも発表しているが、兄弟党は一律平等であるという原則にしたがうと、中国側はそれに相当する回答の論文と資料を発表する権利がある。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡が取り扱っている問題はかなり多く、これらの問題がマルクス・レーニン主義の一連の基本的原理にかかわっており、ここ七、八年らしい国際共産主義運動の多くの重大な事件にもかかわっているのです、われわれの新聞『人民日報』と雑誌『紅旗』の編集部は、真剣な研究をおこなったうえ、一九六三年九月六日からつぎつぎと論評を発表してきました。いままでのところ、ソ連共産党中央委員会の公開書簡にたいするわれわれの論評は、本文をふくめて、やつと七編発表したにすぎない。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡にたいしては、われわれはまだ論評し終わっていない。ソ連の中央クラスの新聞、雑誌と地方の新聞、雑誌に掲載されたおびただしい反中国の論文にいたっては、われわれはまだ回答をおこなっていない。

一九六三年十月二十五日、フルシチョフは新聞記者の問いに答えて、公然たる論戦を停止することを提起した。だが、その日のあと、ソ連の新聞、雑誌は相変わらず中国を攻撃する論文を掲

載しつづけている。

さいきん、ソ連共産党指導部はまた、公然たる論戦の停止をもちだすとともに、公然たる論戦は「共産主義運動にゆゆしい損害をもたらした」といった。われわれはソ連共産党指導部に問いだしたい。いままできみたちは、公然たる論戦は「世界共産主義運動全体の利益のため」^⑬であり、「唯一の正しい、真のマルクス・レーニン主義的な原則的立場」^⑭である、とのべたが、きみたちは、ある時にはこういったかと思うと、またあるときにはああいう。いったいどんな術策をもてあそばさうというのか。

われわれはまたソ連共産党指導部に問いだしたい。きみたちは二〇〇〇編にのぼる反中国の論文と資料を発表したが、われわれはやつと一〇編にのぼる回答の論文を発表したにすぎないし、しかも、ソ連共産党中央委員会の公開書簡一通にたいしてさえ、まだ回答し終わっていないのに、回答を停止するよう要求されている。これは兄弟党の関係の平等の原則に合致しているといえるだろうか。きみたちはあれほど長いあいだ、あれほど多くのことを語ったが、われわれはやつと少しばかり語りはじめただけである。それなのに、きみたちはもう辛抱しきれなくなり、たまらなくなり、耳をかしたくなくなっている。これが民主的討論の原則に合致しているといえるだろうか。

われわれはまたソ連共産党指導部に問いだしたい。きみたちは一九六三年九月二十一日づけのソ連政府の声明のなかでつぎのようにのべた。中国人が論戦をつづけるならば、「かれらはつぎのことをひじょうにはつきりと心得ておかねばならない。つまり、かれらはその途上でソ連共産党と全ソ連人民のもつともだんこたる反撃をうけるだろう」と。ソ連共産党指導部がこうした大げさな話をするのは、むきだしのおどしと脅迫ではないか。きみたちは、いったん命令さえくだせば、他の人がおとなしくいうがままになり、大声で一喝しさえすれば、他の人がふるえあがってしまうとでも本気に考えているのだろうか。率直にいつて、九月二十一日いらい、われわれは、いったいどのような「もつともだんこたる反撃」なのか、教えてもらいたいものだとい大いに期待して、ずっと待つてきたのである。

同志のみなさん、友人のみなさん、きみたちはあやまつている。まったくあやまつている。

公然たる論戦がすではじめられたからには、規則どおりにすすめられなければならない。きみたちが自分のいいたいことはもう思う存分にいつくしたと考えるならば、相手方にも十分な回答の機会をあたえるべきである。きみたちがまだいいたいことがたくさんあると思つていならば、ではどうぞ、どうぞ思う存分にいつてもらいたい。だが、同様に、きみたちが思う存分にいつくしたあとは、やはり相手方にも思う存分にいわせなければならない。ひと言でいえば、

機会均等でなければならぬことである。きみたちも兄弟党は平等であるといっているではないか。どういうわけで、きみたちは自分が兄弟党に攻撃をくわえたいと思うときにはいつでも、公然たる論戦をひきおこし、自分が論戦を停止したいと思うときにはいつでも、攻撃された兄弟党からおおやけの回答をおこなう権利をうばおうとするのか。

ソ連共産党指導部は横暴にも公然たる論戦をひきおこし、公然たる論戦を拡大し、あくまで公然たる論戦をつづけてきたが、いままた公然たる論戦の停止をわめきたてている。これはいったいどうしたことなのか。

見上げたところ、事態のなりゆきは、公然たる論戦をひきおこしたものの意表に出ているようである。ソ連共産党指導部がもともと自己に有利であると考えていた公然たる論戦は、いまやみずからの意図に反する方向に発展している。ソ連共産党指導部の手には、真理がにぎられていない。かれらは他人を攻撃するさい、ただデマ、中傷によつて、事実を歪曲し是非を転倒させることとにたよれるだけで、いったん論戦が展開され、事実をあげて道理を説かねばならなくなると、かれらの立っていた土台はぐらつき、かれらはおじけづいたのである。

レーニンのはかつて、修正主義者にとつて、「理論や綱領、戦術、組織の面での主要な意見の相違をはつきりさせることほど、いちばん不愉快で、いちばんおもしろくなく、いちばん受けいれ

られないものはない」(レーニン『ふたたび国際社会主義ビュローと解党派について』『レーニン全集』第二〇巻)とのべたことがある。

ソ連共産党指導部の現在の境遇はまさにこのようなものである。

公然たる論戦にたいする中国共産党の立場は周知のとおりである。われわれははじめから、兄弟党のあいだの意見の相違は内部での話し合いによつて解決すべきであると考えている。公然たる論戦はわれわれがひきおこしたのではないし、またわれわれが望んでいるものでもない。

公然たる論戦がすではじめられ、また、ソ連共産党指導部が公然たる論戦は「レーニンの方式にしたがつてやるものである」④とのべたからには、論戦は民主的な討論を基礎として、事実をあげて道理を説くという方法でおこなわなければならないし、真相を徹底的に明らかにするまですすめられなければならない。

さらに重要なことは、ソ連共産党指導部がマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を公然と裏切り、宣言と声明を公然と破棄したからには、かれらはわれわれに、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義をまもらず、宣言と声明の革命的原則をまもらないのを期待することはできないのである。論戦が国際共産主義運動の原則上の是非の問題にかかわっているからには、これらの原則上の是非の問題を徹底的にはつきりさせなければならない。これもまた、嚴

爾なマルクス・レーニン主義的な態度である。

問題の本質はつぎの点にある。当面の国際共産主義運動における意見の相違は、マルクス・レーニン主義と修正主義との意見の相違であり、プロレタリア国際主義と大国排外主義との意見の相違である。公然たる論戦を停止することによって、このように重大な原則上の意見の相違を根本的に解決することはできない。それとは反対に、公然たる論戦を通じ、事実をあげて道理を説くことを通じて、はじめて真相を明らかにし、是非をはつきりさせ、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を基礎とする国際共産主義運動の団結をまもり、強めることができるのである。

マルクス・レーニン主義は科学である。科学は論戦をおそれず、論戦をおそれるものは科学ではない。当面の国際共産主義運動における大論戦は、いま世界各国の共産主義者、各国の革命家、各国の革命的人民が、頭を働かし、問題を思索するよう促しており、また、マルクス・レーニン主義の基本的原理にもとづいて、自国の革命の問題と世界の革命の問題を真剣に思索するよう促している。この大論戦をへて、人びとは最後には是非をはつきりさせ、ほんとうのマルクス・レーニン主義とエセのマルクス・レーニン主義とを区別することができるであろう。この大論戦をへて、全世界のあらゆる革命的要因が動員され、すべてのマルクス・レーニン主義者が思

想と政治の面できたえられ、マルクス・レーニン主義を自国の具体的実践とむすびつけるのにいっそう習熟するであろう。マルクス・レーニン主義はかならずよりいっそうゆたかになり、発展させられ、そして、新しい高峰に達するであろう。

団結をまもり、強める道

ソ連共産党指導部の修正主義と大国排外主義は、社会主義陣営の団結と国際共産主義運動の団結に、かつてないゆゆしい脅威をもたらした。ソ連共産党指導部の修正主義と大国排外主義の立場は、つまり分裂主義の立場でもある。ソ連共産党指導部がどんなに大声で「団結」をわめきたても、またどんなに他人を「分裂主義者」、「セクト主義者」だとののしっても、かれらが修正主義と大国排外主義を固執するかぎり、実際にはニセの団結をやり、分裂活動をおこなっているのである。

中国共産党、すべてのマルクス・レーニン主義政党とマルクス・レーニン主義者は、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を堅持している。われわれのこの立場は、社会主義陣営、国際共産主義運動のほんとうの団結をまもり、強める唯一の正しい立場である。

マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義は、社会主義陣営、国際共産主義運動の団結

の基礎である。ただこのような基礎のうえに立つてこそ、兄弟党、兄弟国の団結をうちたてることができる。この基礎をはなれては、兄弟党、兄弟国の団結は全然話にもならない。マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義のためにたたかうことは、つまり国際共産主義運動の団結のためにたたかうことでもある。原則を堅持すること、団結を堅持することは不可分の結びついている。

ソ連共産党指導部が団結を望むふりをするのではなく、ほんとうに団結を望んでいるなら、かれらはかならずマルクス・レーニン主義の基本的原理に忠実でなければならず、マルクス・レーニン主義の階級と階級闘争についての学説、国家と革命についての学説、とくにプロレタリア革命とプロレタリアート独裁についての学説に忠実でなければならず、階級協調あるいは階級的降伏をもって階級闘争とすりかえることは絶対にゆるされないし、社会改良主義あるいは社会平和主義をもってプロレタリア革命とすりかえることは絶対にゆるされないし、あれこれの口実でプロレタリアート独裁を解消することは絶対にゆるされないものである。

ソ連共産党指導部が団結を望むふりをするのではなく、ほんとうに団結を望んでいるなら、かれらはかならず一九五七年の宣言と一九六〇年の声明の革命的原則を厳格にまもらなくてはならず、自党の綱領をもって兄弟党が一致してとりきめた共同綱領とすりかえることは絶対にゆるさ

れない。

ソ連共産党指導部が団結を望むふりをするのではなく、ほんとうに団結を望んでいるなら、かれらはかならず敵と味方の区別をはっきりさせなければならず、かならずすべての社会主義国と団結し、すべてのマルクス・レーニン主義的兄弟党と団結し、全世界のプロレタリアートと団結し、すべての被抑圧人民と被抑圧民族と団結し、平和を愛するすべての国や人びとと団結して、世界人民の主要な敵であるアメリカ帝国主義とその手先に反対しなければならず、敵と味方の関係を転倒させ、敵を友とみなし、友を敵とみなすことは絶対にゆるされない。また、米ソの二大國で世界を牛耳るという幻想から出発して、アメリカ帝国主義や各国反動派、裏切り者チトー一派と連合して、兄弟国、兄弟党、各国の革命的人民に反対することは絶対にゆるされないのである。

ソ連共産党指導部が団結を望むふりをするのではなく、ほんとうに団結を望んでいるなら、かれらはかならずプロレタリア国際主義に忠実でなければならず、宣言と声明に規定されている兄弟国、兄弟党間の関係についての準則を厳格にまもらなければならず、大国排外主義と民族的利己主義の政策をもってこれらの準則とすりかえることは絶対にゆるされない。いいかえれば、かれらは――

かならず互いに団結するという原則をまもらなければならない。一部の兄弟党をかきあつめてその他の兄弟党に打撃をくわえたり、セクト主義的、分裂主義的活動をおこなったりすることは絶対にゆるされない。

かならず相互支持と相互援助の原則をまもらなければならない。援助という名をかりて、実際には支配をおこない、「国際的分業」を口実にして、兄弟国の主権と利益をそこなったり、兄弟国が自力更生で社会主義を建設するのに反対したりすることは絶対にゆるされない。

かならず自主独立と平等の原則をまもらなければならない。自己を他の兄弟党のうえにおき、自党の綱領、路線、決議を他の兄弟党におしつけることは絶対にゆるされず、兄弟党の内部問題に干渉し、いわゆる「個人迷信反対」を口実に転覆活動をおこなうことは絶対にゆるされず、兄弟党を自己の付属品とみなしたり、兄弟国を自己の従属国とみなしたりすることは絶対にゆるされない。

かならず話し合いで見解の一致をはかるという原則をまもらなければならない。「多数」をたのんで、自党のあやまった路線をむりやりにおしすすめることは絶対にゆるされず、自国の党大会または他国の党大会を利用し、決議、声明、指導者の演説などの方式を通じて公然と名指して他の兄弟党を攻撃し、ひいては思想上のくいちがいや国家間の関係にまでおしひろげることは絶対にゆるされない。

対にゆるされない。

要するに、ソ連共産党指導部がほんとうに社会主義陣営の団結と国際共産主義運動の団結を望んでいるならば、かれらの修正主義、大国排外主義、分裂主義の路線を徹底的に放棄しなければならぬ。口先だけではなく、实际行动のなかでも、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義に忠実であり、現代修正主義と現代教条主義に反対し、大国排外主義その他の形式のブルジョア民族主義に反対し、セクト主義と分裂主義に反対してこそ、はじめて社会主義陣営の団結と国際共産主義運動の団結をまもり、強めることができるのである。これこそ団結をまもり、強める唯一の実行可能な道である。

当面の世界情勢は、全般的にみればたいへん有利な情勢である。国際共産主義運動はすでに輝かしい勝利をおさめ、国際的な力関係を根本的にあらためている。現在、国際共産主義運動は修正主義と分裂主義の逆流におそわれてはいるが、これもまた歴史の発展進路における合法的な現象である。それは国際共産主義運動といくつかの兄弟党に一時的な困難をもたらしてはいるが、修正主義者が自己のすがたをさらけだして、マルクス・レーニン主義と修正主義との闘争をひきおこしたことは、結構なことである。

疑いもなく、マルクス・レーニン主義はかならずそのうるわしい青春の生命力を発揚し、全世

界にみちひろがるであろう。そして、国際共産主義運動はかならずマルクス・レーニン主義を基礎としていっそう強大になり、いっそう団結するであろう。国際プロレタリアートの事業と世界人民の革命事業は、かならずいっそう輝かしい勝利をかちとるであろう。現代修正主義はかならず徹底的に破産するであろう。

われわれは、つぎのことを冷静に考えるようソ連共産党指導部に忠告したいと思う。つまり、きみたちが修正主義と分裂主義を固執することは、けつきよくきみたち自身にどんな結果をもたらすだろうか。われわれは、もう一度誠意をこめてソ連共産党指導部に呼びかけたい。きみたちがマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の基礎にたちもどり、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明の革命的原則の基礎にたちもどり、宣言と声明に規定されている兄弟党、兄弟國の相互関係についての準則にたちもどり、原則を基礎として意見の相違をとりのぞき、国際共産主義運動の団結を強め、社会主義陣営の団結を強め、中ソの団結を強めるよう、われわれは望んでいる。

われわれとソ連共産党指導部とのあいだには重大な意見の相違が存在しているとはいえず、われわれはレーニンとスターリンの教えをうけて成長してきたソ連共産党の広はんな党员とソ連人民にたいして、十分な確信をもっている。中国の共産主義者と中国人民はいままでどおり、終始変

わることなく中ソの団結をまもり、中ソ両国人民のあいだのあつい友情をかため、深めてゆくであろう。

全世界の共産主義者はマルクス・レーニン主義の基礎のうえに団結しよう！

- ① 一九六三年十二月六日付のソ連の『プラウダ』紙編集部の論文「国際共産主義運動の一致団結をめざす」
- ② 一九六二年四月二十四日、フルシチョフとアメリカの『ルック』誌の発行者ガードナー・カウルスとの談話。一九六二年十二月十二日、ソ連最高会議でのフルシチョフの報告。
- ③ 一九六三年二月九日号のアメリカの週刊誌『ザ・ネーション』の論文「外交のための機会——集団にヒビがはいった」
- ④ 一九六二年三月二十六日号のアメリカの『ニューズウィーク』誌の論文「モスクワと北京——ヒビはどれほどのものか」
- ⑤ 一九六三年九月三十日号の『USニュース・アンド・ワールド・リポート』誌の論文「部分的核停条約の締結で、フルシチョフは身のふり方を変えたらうか」
- ⑥ 一九六二年十月十七日付のイギリスの『タイムズ』紙の記事「アメリカは共産党の団結をすでに過去

のものともなしている」

- ⑦ 一九六三年七月一日号のアメリカの『ニューズウィーク』誌の記事
- ⑧ 一九六三年六月、トロツキストのいわゆる「第四インター」の再統一大会で採択された「国際情勢とわれわれの任務」と題する決議
- ⑨ 一九五六年四月十三日から十五日までアメリカのトロツキスト社会主義労働者党全国委員会の会議で採択された「ロシア革命の新段階とスターリン主義の危機」と題する決議
- ⑩ 一九六一年十二月五日、トロツキストのいわゆる「第四インター」の国際書記局が採択した「ソ連共産党第二十二回大会の反響」と題する決議
- ⑪ 一九六〇年二月四日、社会主義諸国兄弟党代表団を招待した宴会でのフルシチョフの演説。
- ⑫ 一九六〇年六月二十四日、ブカレスト「二カ国兄弟党会談でのフルシチョフの発言。
- ⑬ コンゴ問題についてエルンスト、ブエルネイと「リュマニテ」紙記者とのインタビュー（一九六〇年七月二十六日付の、ベルギー共産党の『ドラポール・ルージュ』紙に掲載）
- ⑭ 一九五八年四月二十四日付の『ドラポール・ルージュ』紙の論評「ベルギー共産党とユーゴスラビア共産主義者同盟大会」
- ⑮ 一九六二年二月二十二日付の『ドラポール・ルージュ』紙掲載のジャック・グリッパの論文のなかに引用されたジュアン・ブルームの一九六一年十二月三日、ブリュッセル地区大会における発言

- ⑯ ジュアン・ブルーム「急速で完全な勝利のために——共産党の二つの提案」（一九六〇年十二月二十九日付の『ドラポール・ルージュ』紙に掲載）
- ⑰ 一九六一年十月二十七日、ソ連共産党第二十二回大会でのフルシチョフの結語。
- ⑱ 一九六二年二月二十一日付のソ連の『プラウダ』紙編集部の論文「われわれの時代の旗じるし」
- ⑲ ソ連の『コムニスト』誌一九六一年第十六号掲載の編集部の論文「共産主義の新しい勝利をめざす」
- ⑳ ㉑と同じ
- ㉑ 一九六一年十一月四日付のソ連の『プラウダ』紙の社説「レーニン主義の党の歴史的な大会」

ソ連共産党指導部は現代最大の分裂主義者である
ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（七）

1964年 初版発行

出版者 外文出版社
(北京阜成門外百万莊)

発行者 中国国際書店
(北京 P. O. B. 399)

編号: (日) 3050-891

3-J-579P

00034

★ソ連共産党指導部とわれわれとの

意見の相違の由来と発展

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

B 6判 八六ページ 定価 四〇円

★スターリン問題について

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(二)

B 6判 三四ページ 定価 二〇円

★ユーゴスラビアは社会主義国か

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(三)

B 6判 六二ページ 定価 三〇円

★新植民地主義の弁護士

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(四)

B 6判 五〇ページ 定価 二〇円

★戦争と平和の問題での二つの路線

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(五)

B 6判 五四ページ 定価 三〇円

★根本的に対立している二つの平和共存政策

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(六)

B 6判 六二ページ 定価 三〇円

★ソ連共産党指導部がインドと連合して

中国に反対している真相

B 6判 六二ページ 定価 三〇円

★全世界の人民は団結して核兵器を全面的

に、徹底的に、あますところなく、だん
こととして、禁止し、廃棄しよう

A 5判 二二八ページ 定価 一五〇円

★哲学・社会科学工作者の戦鬪的任務

B 6判 八八ページ 定価 五〇円

